
極道と暴走族

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極道と暴走族

【Nコード】

N4030Y

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

実は極道の義娘な夜月美羽と、実は暴走族総長な和泉聖夜の二人の恋愛物語。あんま極道とか暴走族とか関係ないといえなくもない。唯友人たちの悩み等を解決しているだけと言えなくもない。だがまあ、恋愛はちゃんとしているといえなくもない。とにかく、いろいろとシリアスなんです（笑）

登場人物（前書き）

ネタバレが多大に含まれます

登場人物

○夜月美羽やつき みづ

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

黒の髪と瞳の美少女。髪は腰のあたりまで伸ばしてあり、サラサラのストレート。

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群で喧嘩もめちゃくちゃ強い。

5歳の時に夜月組の現組長に拾われた。そのことは組の皆や信頼できる人たち以外には秘密。

ある人を探している。

○和泉聖夜いずみ せいや

17歳 鬼瀧学園 2年生

銀の髪と青い瞳の美青年。髪は首のあたりまでで、所々はねている。暴走族、神龍しんりゅうの総長。そのことは親には秘密。本当は和泉グループという大企業のトップの息子。

表では優しい紳士だが、裏は結構鬼畜で好きな人ほど虐めたくなる性格。

実は美羽が探していた人で、昔は金髪だった。

○永瀬樹ながせ たつき

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

美羽の親友。

明るい茶髪でブラウンの瞳。ショートヘアの美人さん。

意外に涙もろく、感動ものに弱い。怖いもの知らず。クラス委員で皆のリーダー的存在。

美羽の家庭事情などはだいたい知っているが、気にせず付き合っている。

○夜月海斗やつき かいと

17歳 城ヶ崎学園高等部 2年生

赤がかつた黒髪に紅色の瞳。

格好よいのでモテるけど、冷たくあしらう。

夜月組の若頭。

美羽を溺愛している。樹とは喧嘩ばかりしている。聖夜の事も嫌いで、会えば嫌味ばかり言っている。

○佐伯空さへき そら

17歳

美羽の双子の兄。

今は若狭と一緒に外国に住んでいる。

美羽のことを憎んでいる。

髪色はこげ茶で、右側の前らへんの髪だけ少し長めにしてあるけど、後は短め。瞳の色は茶色っぽい黒。

○間江千歳まへ ちとせ

17歳 鬼瀧学園 2年生

神龍の副総長。

黒髪に青のメッシュで、青のカラコンをしている。

無愛想で無口。

神流の皆（特に幹部）のことは信頼している。

○宝樹渚たかしの ぎんな

16歳 鬼瀧学園 1年生

神龍の幹部。

オレンジの髪に茶色の瞳。

幹部の中で最年少。
甘えたがりでわがまま。
頭は悪いが、喧嘩は強い。

○谷城瑛太やしろ えいた

18歳 鬼瀧学園 3年生

神龍の幹部。

こげ茶色の髪に、紫色のメッシュ。瞳には紫のカラコン。
幹部の中で最年長。
明るい性格。

○乱場葉月らんば はづき

17歳 鬼瀧学園 2年生

神龍の幹部。

金髪にピンクのメッシュが少し。瞳の色はオレンジっぽい感じ。
頭の良さは平均くらい。
実は神龍一番の行動派。
女たらし。

○夜月剛よづき つらき

37歳

灰色の髪に黒の瞳。顔や体にはたくさんの傷がある。

夜月組の組長。若頭時代（25歳のとき）に美羽を拾った。
厳しい事ばかり言うが、それは心配だから。

○和泉拓いずみ たく

38歳

聖夜の父。黒髪のオールバック。
剛の友達。和泉グループのトップ。

○佐伯菜穂さへき なほ

美羽の母親。

肩までの長さの明るい茶髪に、茶色がかった黒色の瞳。今はもう生きていない。美羽が5歳の時に死んだ。

○佐伯若狭さへき わかさ

42歳

美羽の父親。

こげ茶色の落ち着いた雰囲気の髪型に、それと同じ色の瞳。今は外国に住んでいる。

菜穂とは仲良し夫婦だった。

美羽とは、親子の縁を切つてある。

○黒川頼人くろかわよりひと

42歳

菜穂と若狭の高校生時代の同級生。

美羽の本当の父親。

事件の日から行方は不明。

美羽と同じくさらさらの黒髪に黒の瞳。

登場人物（後書き）

いろいろいますが、基本でてくるのはメイン二人と樹、海斗ぐらい
かもしねません。

最初は自己紹介

『お前が殺したんだろ!!』
ちがう

毎日が地獄だった

『人殺し!!』
やめてっ

生きていることさえどうでもよくなってきた・・・

『お前なんかいなくなればいい』
いや・・・聞きたくない・・・

自殺しようとしても怖くてできなくて、そんな自分が情けなく思えてきて・・・。私は、自分という存在が一番嫌いだった。
でも・・・、

『・・・大丈夫?』

光が見えたんだ。私には眩しすぎるくらいの光。みっともないくらいに縋ってしまった。

『また会おうね』

そういつて微笑んだあなたの顔が脳裏に焼きついて離れない。

また、会えるかな

会いたくて 会いたくて。

その想いだけが、私を支えてくれていた……。

「美羽！おはよっ！！」

「おはよ。」

あたしは夜月美羽^{よつき みづほ}。ここ、城ヶ崎学園^{じょうがさきがくえん}の高等部の2年生。この学園は、お金のある人が頭のいい人しか入れないんだ。中等部と高等部があつて、中等部から入った人は優先して高等部に入れる。だからほとんどの人が中学時代からの付き合い。

ちなみに、さつきあたしに挨拶してきたのは、あたしの親友の永瀬^{ながせ}樹^{たつき}。

茶色の髪と瞳をしていて、ショートヘアの美人さん。

「今日だね、テスト発表。」

「えっ……そうだった？」

「そっだよ！……また忘れてたの？」

「……………うん、まあ……………」

どうやら今日は先週やったテストの結果発表があるらしい。

テスト結果は、生徒玄関の掲示板に上位100まで貼り出されるんだ。

正直言つてあたしは興味ないんだよね……。だいたい、そんなのわざわざ大々的に発表しなくてもよくな？って思うんだけど、こう思っているのはあたしだけじゃないはず！
おっと……。そんなことを思っているうちに、掲示板までたどり着いたみたいだ。

「美羽！速く！！」

掲示板の前には、たくさんの生徒達。因みに私は人ごみが苦手。すぐに酔つてしまうから。でもまあ樹が呼んでいるので、仕方なく人を掻き分けて掲示板の前へ。

「やっときた！ほら見て！」

……。あつ。

「すごいじゃん！また1位だよ！羨ましい〜。」

「ホントだ……。よかつたあ。」

「美羽！テンション低すぎ！！」

いや、樹がテンション高すぎなだけだと思うけど……。どういうわけか、あたしはありとあらゆるテストで、中等部の頃から1位を譲ったことがなかった。結構簡単な問題ばかりだったんだけど。……。って、これじゃほかの人が聞いたら嫌味だな。やめておこう。

「ほんつと、美羽はいいよねえ。頭も良くて運動神経も抜群で。」
「そんなことないって。樹だつてすごいじゃん。いつも5位以内には入ってるし、運動神経だつていいし……。ファンクラブまであるしね。」

そう・・・樹には中等部・高等部あわせて数え切れないほどのファンがいる。性格だつて良いし・・・何よりモデル並みにきれいだから。なんたつてあたしの自慢の親友だからね。よからぬ事を考えている男子から、あたしが護つてあげなきゃ。まあこの学校は素行はいい人ばかりなはずだから、あんまりそんな事件はないと思うけど。というかないけど。

「そんなこと言つたら美羽なんて「よっ！美々羽！！」

ぎゅう〜！！

「うわっ！！」

「ちよつと海斗！美羽から離れてよ！」

「うるせえよ！俺の美羽に近づくんじゃねえ！」

そのまま2人は喧嘩を始めてしまった。どうでもいいからあたしを巻き込まないでほしいんだけど。

つていうか、さっきから海斗にまわされた腕がしまつていって・・・

く・・・・・・苦しい！！死ぬ！！！！

「かつ、海斗！くるしつ・・・離して！！！！」

「えっ？あ、ごめん！」

はあっ・・・はあっ・・・

し、死ぬかと思つた・・・。

こいつは夜月海斗^{かいつ}。赤がかつた黒髪に紅色の瞳で、（見た目だけはカッコイイからめちゃくちゃモデルし、告白だつて1週間に一回は必ずある・・・全部振ってるらしいけど。そしてあたしと名字が一

緒な事に気づいた人もいると思うけど、海斗はあたしの義理の兄弟。あたしは5歳の時海斗の父親に拾われた・・・まあ、この話は後々・・・長くなりそうだし。

。なぜか、樹と海斗は気が合わないらしく、いつも喧嘩ばかり・・・

まあ、いつか・・・。喧嘩するほど仲が良くなってよく言っし。ん？これって逆に気が合ってるんじゃない・・・？なんて言って二人に猛烈に怒られたことがあるからそれは言わない。

「美羽、大丈夫？」

「ほんつとごめん！俺、気づかなくて・・・。」

「いや・・・大丈夫だから。気にしなくて良いよ。」

ここで許さなかったら、今日一日中許されるまでごめんって言って付きまとわれるのがおちだ。それはさすがに嫌。はっきり言っとうざい上に面倒。そんなこんなで、あたしたちは教室へと歩を進めた。

〈in教室〉

「夜月さん！また1位だったね！さすが〜！！」

「い・・・いや、そんなことないっつて。」

「夜月！この問題なんだけど、わかんないから教えてくれる？」

「う、うん。いいよ。」

「あっ！！私も！」

「わかった。・・・えつと、一人ずつでお願いします・・・。」

教室に入ったとたん、クラスメイトに囲まれました。席にたどり着くのが大変だった・・・。まあ、これはいつものことなんだけど。

毎度この女子の迫力には驚かされるばかりで……。皆、成績上げるのに必死なんだなって思う。

そんな人たちのためにも、心の奥底では面倒だと思いつつもあたしは丁寧に教えていく。あたし説明とかするの苦手なんだけど……みんなあたしの説明で納得してくれるからすごい。尊敬するよ。

ちなみに、この学園はA〜Eクラスまであつて、あたしはC組なんだ。樹と海斗も一緒。

樹は教室入ったとたん、樹ファンクラブの方々にかこまれた。これもいつもの光景だからもはやだれも何も言わない。一種の日常だ。海斗は誰も近寄るなオーラを出しながら、自分の席についた。これもいつもの事。ただこれには未だになれずに怯えてる人もいるけど、ついでに、海斗はあたしの前の席で、あたしの隣が樹。あたしは、後ろから2番目の一番窓側。こここの席が一番落ち着くんだよね。

今はって言うかいつもそれどころじゃないけど……。

こうしてあたしの学園生活は過ぎていく。

夜月組

「夜月さん！さようなら！！」
「うん。さようなら。」

やっと長い長い授業が終わった。今日は樹は学級委員の仕事で、遅くなるらしいから海斗と家に帰ることにした。学園の門の前では何台かの車が停まっていた。恐らく、お金持ち達の車だろう。見るからに高級そうなものばかり・・・私的には、普通なので充分だと思っただけだな。でも実は、夜月家もすごいお金持ちなんだ。あたしも初めて夜月家を訪れた時はすごい驚いた。

「美羽ー！早くしろよ！遅いぞー！！」
「・・・・・・・・・・。」

そんな海斗の声で、何人かの下校中の生徒がこつちを向いた。ああ、そんな大声であたしの名前を呼ばないでよ！恥ずかしい・・・。あんま目立ちたくないんだけど。

「美羽ー！！」

・・・・・・・・他人の振りしていいですか。

「ほら！手えつないで！！」
「やだよ。子供じゃないんだから。」
「駄目。はぐれるだろ。お前方向音痴なんだから。」
「・・・・・・・・・・。」

おとなしくつながれることにした。いや、だって方向音痴だったのはちゃんと自覚・・・してるし・・・でもそうはつきり言われるとなんだか悲しいんだけど。まあどっちにしろ、海斗は一度言い出したら聞かないというか、聞こうともしないからな・・・。しようがないか。こうしてあたし達は我が家へと帰っていった。

「お嬢!! 若!!! 戻りやしたか!!!」

「おう。」

「ただいまー。」

何出分か歩いて、やっと家に帰れた。途中で道行く人に『仲良しねえ』とか言われてしまったんだけど・・・。あれ、絶対恋人だと思われてたぞ・・・。

因みに、今私たちに話しかけてきた・・・というか、挨拶してくれたのは・・・んー説明すると結構面倒なことになるんだけど。実は夜月家は「夜月組」って言うていう・・・まあ、いわゆる極道つてやつなんだ。で、話しかけてきたのは、海斗のお父さん・・・つまり、夜月組の組長の部下・・・いや、舎弟(?)なんだ。厳ついやつばっかだけど慣れればそんな怖くもないし、結構皆良い人たちばっかりなんだよ。

「どうかしたの?」

それにしてもさっきから皆どたどたしてて騒がしい。いつもはそんなことないのに。

「えーと実は今日、頭のダチが来るみたいで・・・皆その準備で忙しいんですよ。」

「えっ! 友達なんていたんだ・・・知らなかった。」

「親父はあんま人と関わるやつじゃねえからな・・・。」

「海斗は知ってるの？その友達って・・・。」

「いや。知らない。」

ふーん・・・どんな人たちなんだろ？・・・なんかだんだん興味がわいてきたかも。

「ちょっと覗いてみようかな・・・。」

「だーめー!!」

「なんで。」

「危ないだろ！俺の美羽にもしなにかあつたら・・・!!」

「別に海斗のじゃないし。あたしはあたしのだし。海斗には関係ないでしょ。」

「ある！俺、美羽がいなきゃ生きていけない!!」

「んな大げさな・・・。」

そんなこんなで、ちょっとした言い合いが始まりそうになったとき、遠くの方から舎弟の人の声がした。皆に何か伝えて回っている。あの程度、その人との距離が近づいてきて、やっと何を言ったのか聞き取れた。

「おい！頭のダチが来たぞ!!」

「!!!!!!!!」

それを聞いて、さっそく見に行こうと走り出そうとしたら・・・。がしっ！

・・・海斗に後ろから羽交い絞めにされた。くそう！後ろからなんて卑怯だぞ！それでも極道の息子か!!

「・・・!!離してよ!!見に行くんだから!!」

「駄目だつて言つてんだろ!!」

「……くそっ! そつちがその気なら……。あたしは、海斗の力が少しだけ緩むと同時にクルリと方向転換して海斗の方を向いた。そして上目遣い。」

「お願い!! 海斗!!」

「……っ!! だ、駄目だ!!」

えーと……。こういうのなんて言うんだっけ……。? おねだり? ……いや、違うような……。ああ、もう何でもいいや。因みに、自分が今どんな顔してるかなんて例え演技だしてもわかんないし、わかりたくもないからそんなことは考えない。考えただけで吐き気がする。でもなぜか今日まで生きてきて、このお願い攻撃(?) で海斗に負けた覚えはない。最初はこつちも応戦して殴り飛ばしてたんだけど、そしたらいろんな人から怒られるから。

「あとで海斗のいうことなんでも聞いてあげるから!」

「うっ! わ、分かった……。」

よっしゃ! 勝った!!

「で、も! 影でこっそり見るだけだからな?」

「うん。分かつてるって。」

そついうと、海斗はニヤリと笑った。え……。な、何?

「そのかわり、ちゃんと後で俺の言うこと、な・ん・で・も、聞くんだぞ?」

「う……。うん。分かった。」

「なんでも」の部分強調した海斗。なんでもなんて言わないほうがよかつたかな……。ちょっと反省。まあ、とりあえずそのことは置いといて。あたし達は、例のお父さんの友達とやらを見に行くことにした。あの人と友達になれるなんてきつと普通の人じゃないんだろうなあ。

「ねえ、お父さんの友達ってどこ？」

あたしは、傍にいた比較的仲のいい舎弟さんに声をかけた。

「お嬢、お帰りつす！えつと、もうすぐ……。あつ来たつすよ！！！」
「どうやら、息子さんも連れてるみたいっすね。」

近くにいた舎弟さんが教えてくれた。

「んー……。あつ……。」

見えた……。黒い髪をオールバックにしている、なんか……。うん、ホストみたいだ。あつ、でもなんだか目にすごい威圧感みたいなものがある、近寄りがたい雰囲気が出る……。でも、それよりもあたしの目を引いたのは……。その人の後ろにいる……。多分、その人の息子さん……。かな。さらさらのきれいな銀の髪が歩くたびにふわふわ揺れて……。とても印象的な青の瞳と目が合つて、彼はあたしに向かってふわりと微笑んだ。そう、まるで天使みたいに……。ん？目が……。合つた？

「……！！！！！！！」

ヤ、ヤバイ……。海斗とこっさり見る約束だったのに。あろうこ

とか目が合ってしまった……。内心焦りながら、ちょっと前までの出来事を思い出す……。

『美羽！もうちょっと影から見ろよ！！』

『えっ。大丈夫だよ。もうちょっと近くで見ようよ！』

『……はあ。ったく。くれぐれも！見つからないようにしろよ！』

『分かってるってば』

……。い、いや、大丈夫。あの人と目なんて一切合っていない。うん。そうだ。そうしよう！！

「……………美羽。」

……。あ。なんか後ろからものすごい低い海斗の声が……。ものすごい黒いオーラが……。あたしは、恐る恐る後ろを振り向いた。ヒッ！！こわ！！海斗さん！！怖い！！目が笑っていない！！

「な……な、に……。」

「ん？いや、今さあ、美羽……あいつと目が「合っていない！合っていないから！！」」

「あはは……。あっちゃったよな……？」

「だ、だから！合っていないって「合ったよな？」」

「……っ、ご、ごめんなさい。……でも、ちょっとだけだし。」

「ちよつとこつち来い？」

「は、ハイ……。」

そうしてあたしは、海斗に半ば引きずられるようにしてその場を去ったのでした……。

「ん。いい子。」

そういつて海斗はいつもの笑みをつくって、あたしの頭を優しく撫でてくれた。・・・このくらいじゃさっきの怖さは払拭されないけど。

「んじゃあ、戻るか！」

「う、うん。そうだね。」

さっきとのギャップに多少戸惑いながらも素直に従うことにした。そして、そこから運命の齒車が回る。私は廊下を歩いている途中で、彼に会った・・・。

「「「あつ「「「

はい。見事にはもりました。あたしと海斗がそれぞれの部屋へ戻っている途中（さっきの部屋は空き部屋）、例の銀の髪に青い瞳の彼と出会った。さっきははつきり見れなかったから分からなかったけど・・・。あ・・・ね？なんで・・・なんで、“彼”がここに？

“彼”、というのは。あたしには、小さい頃からずっと探してた・・・会いたい人がいた。あたしが一人で泣いてた時、そばに来て慰めてくれた人・・・。闇の中にいたあたしを救ってくれた人・・・。

あたしの・・・光かみさま・・・

「あなた・・・小さい頃、あたしと会いませんでしたか？」

「えっ？」

「あ、い・・・いえ！！なんでもないです！！！！」

何言っただあたし！よく見てみたら結構違っじゃん・・・。「彼は眩し過ぎるくらいに輝く金色の髪だった。今あたしの前にいる彼は残念ながら銀色だ。きつと“彼”と同じ青い瞳をしていたから重なっちゃったんだ。それに、もう何年も経つのに・・・分かるわけないか。心の中で自嘲的に笑って、今日の前にいる彼に笑いかけた。

「えと・・・どうしてここに？」

「いや、ちよつと退屈でさ。抜け出してきちゃったんだ。」

「んなことしていいのよ。」

「うん。俺、無理やり連れてこられただけだし。ここの組長さんにも何にも言われなかったからね。気をつけるよ、としか。」

そういって、彼はにっこりとあたしに向かって笑いかけて・・・。

「ねえ、俺暇だから。話相手になってくれる？」

そういって彼はあたしの腕を引っ張った。

「えっ・・・ちよ・・・。」

うわ、結構強引・・・。なんか意外と力強いな・・・って、当たり前か。男なんだし。

「おい！！俺の美羽にさわんじゃねえよ！！！！」

「ああ、君は来なくていいよ。俺はこの子とだけしゃべりたいから。」

「
そして彼はあたしをふわりと抱きしめた。え、何これ・・・なんでこんなことになってんの？」

「・・・てめえ・・・美羽を離せよ・・・。」

やっぱ・・・海斗めっちゃ怒ってる・・・。

「あゝ、えつと・・・とりあえず離し」駄目

「・・・へっ？」

「君は俺の言うことを聞いていればいいの。わかった？」

えーなんか・・・俺様？なんだかこの人のキャラ分かんなくなってきた・・・。

「・・・はあ・・・。」

そんな青年の言葉にあたしは、返事ともため息ともつかない言葉を返した。

「・・・ところで、何であたしだけ？」

「ん？だってあいつ、俺のことすごい敵視してたから。」

「はあ。」

今、あたしと彼は家の庭にあるベンチに座っている。あのあと・・・彼があたしを抱きかかえ（お姫様抱っこで。ものっそい恥ずかしかった。）ものすごいスピードで海斗をまいたさきにこのベンチがあったのだ。吃驚した。あの海斗でさえ彼のスピードにはついてこれなかったのだ。校内で一番足が速いと言われている海斗が・・・。

「この庭は前に一度迷った時に来たことがあるけれど、それ以来見たことすらなかった。海斗も知らない場所なんじゃないかな？」

「ねえ、美羽」

えっ……。

「な、なんであたしの名前……」

「ああ、さっきの彼が呼んでただろう？」

「あ……そう、ですか。」

「うん。それに……前に俺たち、一度だけ会ったことがあるから。覚えてない？」

……え……それって……もしかして……。

「聖夜……くん？」

「そう。覚えててくれたんだ。嬉しいな。」

「でも髪が……。」

「染めたんだ。こっちの方が俺的には好きだし。」

「そう、なんだ……。」

と、とりあえず、頭の中を整理しなきゃ……。とにかく本当に、「彼」は……今ここにいるんだ……。間違いなんかじゃなかった。ここにいてる彼が、あたしの……。光。

「……。」

「やばっ！なんか泣きそうになってきた……。だめだちゃんと言わなきゃ。ずっと彼……聖夜君に言いたかったこと。それと『ありがとつ』って……。」

「あつ、あり……がとつ……!!」

声が震える。それでも、伝えたいから。必死に言葉を紡いで。

「あの時っ！……あたしを……助けてくれてっ……う、嬉か
っ……た。」

ちゃんと笑えてるかな……？

「ううん……俺はなににも。」

「そんなことない！！聖夜君がいたから、あたしはっ！」

そっとうと聖夜君はくすつと笑って……。

「どういたしまして。俺も君の役に少しでも立てたんなら嬉しいよ。
……ねえ、ひとつだけお願いしてもいい？」

「ん……な、に？」

「俺のこと聖夜って呼び捨てにして……ああ後、無理して敬語
とか使わなくていいからね。」

……ばれてましたか。あんま敬語使うのとか慣れてないからな
……。とうか何気にムードぶち壊し。ああ、でも彼の声はやっぱ
り落ち着くな……。心地よくあたしの心に響く……。あの時も
そうだった。何も変わらない、唯ひたすらに優しい声。

「あつ。そっだ。」

「？」

「ごめん。ちょっと待ってて。」

そして聖夜は紙とペンを出して、何かを書き出し、あたしに差し出した。

「はい。これ。」

「・・・これは？」

そこには、地図らしきものが書いてあった。

「また今度、その場所に来て。裏には住所も書いてあるから。でも、来る時は必ず一人で来ること。分かった？」

「う、うん・・・。それより、ここはどこなの？」

「それは来てからの楽しみでいいこと。ね？あ、誰にも言っちゃ駄目だよ。」

「・・・。。。。。。わかった。」

行った事のない場所だけど・・・。。。。。。ここに行けばきつとまた聖夜に会えるんだ。あたしは、地図を書いた紙を落とさないようにしっかりと制服のポケットに入れた。

「じゃ、俺もう帰るけど・・・美羽は道分かる？」

「・・・。。。。。。ごめんなさい。」

なにせ、方向音痴なもんですから・・・。。。。。。つて、これであたし地図の場所にたどり着けるのかな。でも、なんやかんやで今までも何とかなったし・・・大丈夫か。

「そっか。なら一緒に行こう？」

「・・・覚えてるの？」

こんなに広いところなのにな？それに、結構複雑なところ通ってたと思

うんだけど。

「もちろん。走りながら、目印になるもの何個か見つけてきたから。」

「そう……。」

なんか……複雑。あたしだってもう何年もこの家に住んでるのに……まあ、そんな事を言っているにしてもしょうがないので、大人しくついていく。そして歩くこと10分……。

「美羽!!！」

「あ、海斗。」

海斗が現れた。そしてあたしに抱きついてきた……聖夜を威嚇しながら。でも、海斗はだいたい誰にでもこういう態度だからあんまり気にしない。いちいち気にしてたら、あたしの胃に穴が開く。主にストレスで。

「美羽……こいつになにもされてないか？」

「うん。話してただけだから。ほら、だから睨まない！」

あたしは海斗の頭を軽くたたいた。

「……分かった。……おい、お前早く帰れよ。」

……いや、その前にあんた分かってないだろ。そんな海斗の態度にも聖夜は微笑みながら対応した。……なんか、大人と子供みたい。もちろん海斗が子供の方で。昔からあんま成長してないもんなあ。

「うん。じゃあ、美羽またね。」

「あっ！う、うん！！・・・また。」

そうして聖夜は去っていった。・・・よかった。会えて・・・
また恩返しできたらいいな。

今日は、あたしの長年の夢が叶った日だった。

あの頃（前書き）

微妙にR15くらいの表現入りますので、ご注意ください。

この線からは、お母さん目線

です。

あの頃

『あんななんて・・・いなくなればいいのに』

それは、あたしがまだ5歳の時だった・・・。

あたしの家は、それなりに裕福だった。皆笑顔で・・・幸せだった・・・。その当時のあたしの名字は佐伯さえき。

母の名前は佐伯菜穂さえき なほ。

父の名前は佐伯若狭さえき わかさ。

そしてあたしには双子の兄がいた。

名前は佐伯空さえき そら。

その人たちとあたしで幸せに暮らしていたんだ。

「美羽！ごはん運ぶの手伝って。」

「はい。わかった。」

あたしはまだ子供だから深くは考えていなかった。あたしとお父さんが・・・あんまり似てないこと。でも、空はちゃんとお父さんに似ていたんだ。だからあたしは、空ともあんまり似ていない。最初はお母さんもお父さんも空も。誰も、そんなこと気にした風じゃなかったから・・・それは全然不自然なことじゃないって・・・自然なことなんだって思ってた。

「ただいまあ〜。」

「あつ！お帰り若狭！！」

お母さんが元気にお父さんをむかえに玄関まで行く。お父さんとお母さんはとても仲良しだ。おしどり夫婦って奴かな？あたしはそんな二人が大好きだった。いつだって笑顔の絶えないこの家庭が好きだった。

「美羽。ただいま。」

「うん。お帰りなさい。」

「空は部屋かな？美羽、もうご飯だから呼んできて！！」
「わかった。」

でもね、子供なりに気づいていたのかもしれない。二人があたしを見る目が、ときどき・・・とても冷たいこと。笑ってても、それは心からの笑いじゃなかった。唯、認めたくないだけで。

そして・・・・・、

「・・・空。」

「・・・うん。」

空は・・・いつからかあたしに笑いかけてすらくれなくなった。まるで、心のそこから汚いものでも見ているような目。空はまだあたしと同じ5歳だったから・・・そういう態度を隠そうともしない。それもいきなりで、あたしも最初は戸惑ったけど・・・そのうちそんな態度にも慣れてきたし、なるべく気にしないようにもした。

「ママ。今日のごはんはなに？」

「ん〜とねっ！今日は空の好きなチャーハンだよ！！」
「やった！」

あたし以外の前ではこんなにも笑っているのにね・・・でも、今思えばそれも・・・仕方のなかったことだったのかもしれないと思う。・・・そして晩御飯中。

「空は保育園どうだった？」

「んー？すっごい楽しかった！！」

「そうか。それは良かったなあ。」

「うん！！」

お父さんとお母さんは空とばかり会話をしていた。幸せそうな家族達を見るのは嫌じゃなかったよ。人の笑顔を見ると、自分まで笑顔になれるから。そんな家族達の雰囲気だけが、まだ幼かったあたしの心を支えていた。

「そういえば明日は空たちの誕生日だったな！！」

「そうねえ・・・プレゼント、楽しみにしておいてね」

その言葉に、あたしはとても楽しみでしかたがなくなった。まだ、

大丈夫だと思っていた。

．．．．．そんな思いが、簡単に裏切られるとも知らずに．．．

その日の深夜。

あたしはなかなか寝付けなかったので、水でも飲もうと部屋を出たんだ。ちなみにあたしは一人部屋。暗い場所も怖くなかったので、全然平気だったけど．．．。空にも一応自分だけの部屋があるけど、空は寝る時は決まって、お母さん達のベッドへと入っていった。3人で幸せそうだったな．．．そんな光景をみているとまるで、あたしなんて最初から存在していないような感じがしていたのを、今でも覚えてる。

でも、その日は違ったんだ。

部屋を出ると、空の声がした。．．．それと、お母さんとお父さんの声も．．．。

「もう撲やだよ！なんであんなやつと一緒にたんじょうびなんて．．．！！」

「空．．．．．つ。若狭．．．私も、もうっ限界よっ！！」

．．．．．？なに話してるのかな？

軽い興味で扉の向こうの会話を隠れて聞いていた。．．．．．この行動が最悪の事態を早めてしまうことになったんだ。

「若狭!!」

「パパ・・・どうして?・・・あいつはっ!パパの本当の子供じゃないかもしれないんでしょ!?!」

「・・・空!!」

「・・・いま・・・なんていったの・・・?あたしが・・・お父さんの本当の子供じゃない・・・?あたしは動揺して、その場に座り込んでしまった。」

ガタツ!!

「「!!!!!!!!!!」」

「・・・美羽?」

その音の中にいる皆に聞こえてしまったみたい。お父さんのあたしを呼ぶ声がある。あたしは仕方がなく、皆の前へと姿を現した。

「おとーさん・・・本当なの?・・・さっきのはなし・・・。」

そついいながら、皆の顔を見渡す。もうお母さんですら笑ってくれていなかった・・・。

「ああ・・・本当だ。・・・詳しいことは明日話すから・・・。今日は寝ていなさい。」

あたしは大人しく自分の部屋に戻ることにした。・・・みんなあの視線がとても怖かったから、少しでも早くその視線から逃れたかった。

その日の夜……あたしはずっと泣き続けていたな……。

……そして、運命の日。あたしの誕生日……。

「美羽。起きたか？……話をするから、リビングに来なさい。」
「……うん。」

あたしと空の誕生日は、ちょうど休日だった。だから、朝からなんも楽しくない話を、よりによって誕生日の日に聞かされることになった。リビングに行くと、お母さんと空もいた。……とても冷たい視線をあたしに向けて……。

「美羽。座って。」

あたしは、お父さんに言われ静かに座った。

「美羽。よく聞きなさい。まだ子供のお前ではよくは理解できないと思うが……。」

「……っ若狭。私が話すから……。」
「……ああ、そうだな……。」

お母さんはゆっくりとあたしを見た。その瞳には……怒りと憎しみと……悲しみを、宿らせて。それから、お母さんの悲劇が語られる……。

「私が若狭と付き合ったのはまだ私達が18歳の頃……。」

私と若狭は同級生で、同じクラスになって仲良くなりいろいろ話すようになつて・・・お互いに惹かれあつていった。そして、二人が付き合いだしてちょうど2ヶ月が経つたころ。

ある男の子が転入してきた。

中性的な恐ろしいくらいに整つた顔・・・。周りはいくらでもかつてくらいに騒ぎ立てていたけど、私は興味すらなかった。なんかその人・・・まったく笑わなくて怖かつたし。

なにより、私には若狭がいたから。

。。。。でも、ある日。その人は、私にこういつてきたの・・・。

「俺、君が好きになつた。だから付き合い合つて。」

・・・彼は少し微笑みながらそういつた。

「ごめんなさい。私には恋人がいるので・・・。」

この人も笑えるんだと少し驚きもしたけど・・・それで私の心が変わるなんてことはやっぱりなくて。はつきり断った・・・。

「そう・・・。」

私たちがした会話はこれだけ。・・・これで、諦めてくれると思っていた。

「・・・なのに・・・。」

「まあ、俺は諦めないから。覚悟しておいてね。」

「・・・っ！」

そういつた彼はすごく冷たい瞳で私を見てた・・・怖くて・・・もう、彼とは関わりたくないと思った。だからかは覚えていないけれど、彼の言ったその言葉は無理やり何かの冗談だと決め付けて、若狭にも話す事はなかった。そして、私達が3年になって卒業しても、彼に話しかけられることはあっても脅されたりとか・・・そういうことは一度もなかったから油断していたの、かな・・・。

私と若狭は卒業して、すぐに結婚した。

「・・・そして、何ヶ月か過ぎたある日、事件は起こった・・・。」

・・・それはまだ肌寒さが残る季節のこと。私は買い物ついでに少し散歩でもしてみようと、いつもとは違う道を歩いていた。・・・彼とは、その道の途中にある、公園で会ってしまった。・・・。

私は、歩いている途中で少し疲れたので公園のベンチに座ることにした。それから何分か時間が過ぎてから、彼は私の前に姿を現した。・・・すごく驚いたけど、そこまで警戒しなかったわ。・・・それは高校生時代、結局彼は何もしてこなかったから。今思えばそれも・・・彼の策略だったのかもしれないけれど。・・・。

「・・・なんで、あなたがこんなところにいるの？」

彼は卒業したと同時にどこか違うところへと引っ越したと聞いていた。本当か嘘かは分からない。

「君に逢いたかったから。」

「え？」

「・・・なにを今更・・・と思った。」

「・・・悪いけど私・・・もう、若狭と結婚したから。」

内心はすごく混乱していたけど、私は努めて冷静に言い放った。得体のしれない恐怖を押し込めて。このときすぐに逃げていればよかったのに。・・・。彼はその時、くすりと笑って・・・。

「うん。そんなことくらいもうとっくに知ってるよ？」

私は、その言葉に目を見開いた。・・・だって・・・結婚したことなんて、彼に話した覚えは一度もなかったから。

「・・・な、ん・・・で・・・？」

「言ったでしょ？『俺は諦めないから、覚悟しておいて』って。」

声が震えてまともに言葉なんて出てこなかった・・・体も・・・固まって動けなかった・・・。

「こっち来て。」

その公園は木に囲まれていて隠れる所も多くて、大き目の公園だった。彼は、私が動けないことに気がついて私を抱えあげ、恐らくあんまり知られていないだろう周りからは完全に見えないところへ移動した。

・・・それから彼は、私を・・・無理やり抱いた・・・。

「・・・そして、その次の日、私は・・・妊娠した。」

・・・その意味も、あの時のあたしはよく分からなかった・・・わかってあげられなかった・・・。

「・・・っ」

空は、何も言わずに泣いていただけだった。そういえば空は何故かこの頃から他の人より大人びていたな……。

「あの時！あいつは最後まで笑ってたわっ！！それに……！まるで……なんでもない事のように……っ平然と私達の前に現れてっ……。」

「菜穂っ！！……もういい……。」

目の前が真っ暗になった。……ここから先の言葉は……なんとなく予想できてしまったから……。

「……美羽……そして……双子が生まれて……空は俺の遺伝子を濃く受け継いで、お前は……あいつの遺伝子を主に濃く受け継いだ……だから俺は、はつきりとお前の本当の父親とは……いえない。」

ああ、だからあたし……こんなにもお父さんに似てなかったんだ……。こんなにもこの家族に……嫌われていたんだ……。

「あんななんてっ！！……生まれてこなければよかったのっ！！そしたら……こんなに、苦しまずにすんだのに……！その顔見ていると……あいつを思い出して……なんで……なんでいつまでも私達を苦しめるのっ！！」

その時、あたしの頬を……一筋の涙が伝った。その言葉はあたしと、そしてなによりもあたしの本当の父と言える人に向けて言われた言葉。ごめんね……お母さん……。

．．．．．生まれてきてしまつてごめんなさい．．．。

がたっ！！

．．．．．？お母さん．．．．．？

「あんたさえいなければっ．．．．．！私達は．．．まだっ．．．
幸せに暮らせていたのに．．．．．っ！！」

そついうとお母さんは、愛用の小型ナイフを取り出して．．．あた
しに向かつてそれを突きつけてきた．．．．．。お父さんと空も驚
いている．．．。

「菜．．．．．穂．．．．．。」

「ママ．．．．．？」

「．．．．．死んでよ．．．．．。」

「．．．．．っ！！や．．．．．め、て．．．．．っ．．．！！．．．
．．．やっ！！！！」

怖い．．．．．こわいつ！！あたしはこのとき初めてお母さんが怖
いと思つた。お父さんが懸命に止めようとしてくれるけど、お母
さんはやめる気配なんてまるで見せない．．．．．。お母さんは、本
当に心のそこからあたしのことが嫌いなんだと．．．改めて実感さ
せられた．．．。あたしは、あたしを殺そうとするお母さんに必死

で抵抗した。

・・・でも、今は抵抗したことに後悔してる・・・。

・・・その理由は・・・

「・・・・・・・・つ！！！！・・・や、やだああ！！！！」

「！！！！・・・うっ！！！！」

「！！！！！！菜穂！！！！！！！！」

「ママあ！！！！！！」

・・・抵抗して、振り回していた手が・・・お母さんのナイフ
を持っている手に当たって・・・持てる限りの力で押し返し
たら・・・そのナイフが・・・お母さんのお腹に刺さってし
まったから・・・。

飛び散るお母さんの血で・・・

目の前が・・・真っ赤に染まった・・・。

お父さんは急いで救急車を呼んでた。空はずっと泣き続けてた・・・。
。しばらくして、救急隊員の人たちが来た・・・。あたしは、
ただただ目の前のこの光景を信じられなくて・・・。呆然と
その場につ立っていることしかできなかった・・・。

・・・あたしが・・・お母さんを・・・殺したの・・・
？

別れと出会い

その後、医師の人にお母さんはかえらぬ人となったことを告げられた。でも、あたしは正当防衛で子供だったから罪には問われなかった。

……そして、お父さんと空は……

「話しかけんなよ！！人殺し！！！」

「お前が菜穂を殺したんだ！」

顔を会わせるたびに言うようになった。『人殺し』……と。そしてついに……

「この家から出て行け。お前とは縁を切る。」

「お前は……俺たちの家族じゃない。」

あたしはこの佐伯の家を離れた……。そしてあたしはその日から約5ヶ月間……施設で育てられた。でも、あたしの中で育った闇が簡単に消えることはなくて……。あたしはその日には、笑わなくなつたし泣かなくなつた……。だからだと思っけど、友達もできなくて……。

そんな中、『セイヤ』が現れた。

それは、あたしが施設に入って間もない頃のこと。

とてもいい天気だった。施設に入っている子たちは、あたしを入れて10人程度。その皆と施設の大人たちで遠足に行くことになった。・・・理由は、『世の中の素晴らしさをもっとわかってほしい』からだろう。・・・あたしは、こんな世の中・・・って思っていたけど・・・まあ、それはおいといて、あたしはその遠足の帰り・・・迷子になったんだ・・・しばらく皆を探し回ってたけど、そのうち疲れてきてしまったので、近くにあった人気のないベンチに座って休憩することにしたんだ。正直言って悲しくはなかった・・・あれ以上の悲しみが、あたしの中にはあつたから・・・。

それから10分くらい経った時だった。

「君、どうしたの？大丈夫？」

あたしの目の前に、一人の男の子が現れた。・・・その男の子が聖夜だった。闇の中にいるあたしには眩しすぎるくらいの金色の髪に、澄んだ青い瞳。

天使みたい・・・。

そんな事を思っているうちに、聖夜はあたしの隣に座った。

「・・・なにか用？」

突き放される前に、突き放す。あたしはいつの日からか、そんな接し方しかできなくなっていた。・・・怖い、から。闇の中にいるのは哀しい。でも、光の中にいてそれを失うのが怖い・・・。どうせ皆あたしから離れていくんなら、最初から突き放していた方が楽、だから・・・。だめだな・・・あたしは・・・。

「ううん。特に何も無いけど・・・。おれ、暇だから。話し相手になつてよ!!!」

にこり

本当に輝いているかのような笑顔に絆されたのかもしれない。少しくらいならいつかと思った・・・。それに、どうせ会うのは今日が最初で最後だろうし・・・。それに、思うんだ・・・。施設の皆は明るくて元気だけど・・・皆なにかしら、闇の部分隠しているように見えることがある・・・。だから、このなんのかけりもない無邪気な笑顔なんて最近はあんまり見てなくて・・・見ようともしなくて、この笑顔に・・・救われた気がした。あたしのしたことが・・・罪が許されるようなきがしたんだ。

・・・許されてはならないことなのに・・・。

「いいよ。」

こういったこと・・・もう、後悔はしたくない。現にあたしは聖夜に会えて・・・よかったと思ってる。それから、たった数分しか経つてなかったけど、あたしは聖夜と話しているうちに、だんだん楽しくなつてつて・・・完全に警戒を解いていた。

「・・・そういえば、聖夜君はどうしてこんなところにいるの？」
「それは・・・うん・・・退屈だったから？」

そういつた彼は、少し疲れているようにも見えた。

「??？」

「美羽は知らなくていいことだよ。」

そういい、無理に笑顔を作った聖夜は、これ以上聞くなと喋っているように・・・。追求するのはやめた。

「美羽は？」

そう聞かれて、少し焦った。この話題は振らないほうがよかったかと・・・。まさかあたしまで聞かれるなんて思ってなかった。普通に考えれば当たり前前の流れなのに。

「えっ・・・あ、あたしはその・・・迷ったの・・・。」

「・・・ほんとのことだったけど、ちょっとこう言つのは恥ずかしかったな・・・。」

「・・・えっ！・・・大丈夫なの？家族とか、心配してるんじゃない？」

「・・・うん。大丈夫。」

あたしに家族なんてもういないしね。

「本当に？」

ビクッ!!

心の内を見透かされたような気がして、肩が震えた。

「……うん。そのうち誰か来るよ。」

「……その“誰か”って……だれ？」

「……」

なんでそんなこと聞くの？あなたには関係ないでしょって……。そう聞いたかった……でも、あたしの出した言葉はそれとはまったく違うもので……。

「……施設の人。」

本当はわかってほしかったのかもしれない。

「家族は……もういないから……。」

受け入れてほしかったのかもしれない。

「……そっか……。」

「……うん。」

ずっと待っていたのかもしれない。

「大丈夫だよ。いなくなったりしないから。」

この言葉を。

「……ねえ、おれに話してくれる？……美羽のこと。」

「……どうして？」

「知りたいから。」

……

……聖夜になら、話しても大丈夫な気がした。あたしと年だつて
そう変わらないはずなのに……。妙な安心感が、そこにはあった。
……。それからあたしは、聖夜にあの誕生日のことを話した。……
まだ幼かったから、言葉はかなり拙かったけれど……。それでも聖
夜は最後まで黙って聞いてくれた。

「……だから……。今はその家を出て施設にいるの……」
「。。。」

……話している最中泣きそうになってしまったけれど、なんとか
最後まで言えた。

……泣いちゃ駄目だ……。泣いちゃっ……

「……泣いてもいいよ？」

「……っえ？」

「ずっと、ずっとがまんしてたんだよね？美羽、偉いね。・・・だ
けどもう、がまんなんてしないでいいよ・・・。」

・・・ああ・・・なんでこの子はあたしの欲しい言葉ばかりくれる
のだろうか・・・。

・・・このときの聖夜が・・・あたしは・・・

神様みたいに思えた・・・。

・・・それからあたしは、聖夜の前でみっともなく泣いてしまった。
聖夜は、ずっとあたしの頭を撫で続けていた・・・。あたしが誰か
の前で泣くなんてことほとんどなかったから、少しだけ恥ずかしか
ったけれど。でも、心の中でずっともやもやしていたものが、すう
っと涙と一緒に零れ落ちていって・・・すごくすっきりしたのを覚
える。聖夜は施設の人たちが来るまで、ずっと一緒にいてくれた。
・・・。

次の日からあたしは、少しずつただけど笑えるようになった。友達
も少しだけ増えた・・・かもしれない。

この日からずっと聖夜にお礼を言いたくて・・・外に出るたびに会
えないかなって思って・・・それが生きがいにもなった。

そして、数ヶ月経ってあたしは夜月組の当時若頭だった、夜月剛やつきこう・
・つまり、海斗のお父さんに拾われ、今に至る。

・・・これが、あたしの『過去』・・・。

聖夜に出会えて、やっと何年も思い続けていた願いが叶ったんだ・
・
・

・・・聖夜にありがとうって言えたんだ・・・。

確かに、あたしをこの『過去』から救ってくれたのは聖夜だ。・・・
・
・でも、あたしにはもうひとつの『秘密』がある・・・。

それはまだ、誰にも言えない秘密・・・。

会いたくて

やっと・・・聖夜に会えた・・・。
彼は何処に住んでいるのだろうか。

どんな所で、どんな生活をしているのだろうか・・・。

会いに行こう

もっと知りたいと思った。彼のことを知れば知るほど。もっと彼を知りたいと思ってしまう・・・。

今日は日曜日。学校はお休み。海斗は、お父さんの仕事を手伝うことになったらしい。・・・そういう時は、だいたい樹と遊びに行っていたんだけど、樹も今日は用事があるらしい。好都合だ。あの日、聖夜がこの家に来てから約一週間が経ってしまったが、これでやっと会いにいける・・・。

そして今あたしは、知らない町にいる。
……ちなみに、迷子ではない。

あたしは、近くを通りかかった女の人に声をかけた。……
もちろん、道を聞くために……。

「あの!!えつと……この場所ってどこら辺だか分かりますか？」
「えっ!?!あ、はい。……ココは、この道を真っ直ぐ行って……
……。」

道行く人たちは、突然声をかけられたのに驚きながらも丁寧に教えてくれた。……そう、あたしは出歩く時、いつも人に聞かなければたどり着けなくて、今日も例にもれず道行く人に聞きながら目的地を目指しているのだ。目的地?……もちろん、前に聖夜が教えてくれた場所。せっかく教えてくれたのに、行かないなんて失礼だしね。それと……あたし自身がもっと聖夜のことを知りた
いって思っているから。

「あの……。」

早速行ってみようと足を踏み出したら、さっきの女の人に呼び止められた。

「何ですか？」

「あの……、本当にそこに行くんですか？」

「?はい。そうですけど。」

「……そうですか……あの、気をつけてくださいね……。」

女の人は、遠慮がちにそういった。

「……………？そこには何かあるんですか？」
「あ……………いえ。そういうわけではないんですけど……………あそこはガラの悪い人たちが多いので、あまり人は近寄りたがらないんですよ……………なので……………」

……………そっか、あたしのこと心配してくれてるんだ。あたしは、自然に笑顔になっていった。他人にとっても親切な彼女に。

「心配してくれてありがとうございます。あたしは大丈夫ですので、どうか気にしないでください。」

あたしがそういうと彼女は、頬を桃色に染めながらも、微笑んで「それでは」と言い、去っていった。やっぱりお礼って、言う方も言われる方も気持ちいいよね。美羽が彼女の桃色に染まった頬を見てそう思うのは、もはや必然。

「ほんと、ガラが悪いのばっかりだな……………」

あたしはポツリとつぶやいた。幸いにもその眩きを拾ったものはいなかった。でも、ガラが悪い人たちが多いつてことはココらへんであつてること。美羽は、さっき言われた道を思い出して、いちいち確認しながら、迷子にならないように慎重に進んでいく。でも、進んだ先は大きな古びた建物ばかりで、普通の家っぽいものは何もなかった。物覚えは良くせに、なぜ迷子になるのか不思議だ……………。美羽はそんな事を思いながらも、どんどん先に進んでいく……………。多分この行動が、迷子になる原因なのだと思うのだけれど、本人はまったく気づかない。

そうして歩いているうちに、少し広めの公園に着いた。ちょっと一休みしよう。さすがに何時間も歩きっぱなしで疲れたので、美羽は

公園のベンチに座り、休憩することにした。そして、休憩すること
10分。

「ねえ、お嬢さん！一人？」

3人の男が近寄ってきた。・・・メンドゥッ！！

「・・・・・・・・それが何か？」

「うわっ！そんなに睨まないでよ！！・・・可愛いなあ・・・」

「・・・・・・・・なにこいつ。頭大丈夫デスか？」

「ねっ。こんなところつまらないでしょ？」

「俺らと一緒に遊ぼうぜ？」

「・・・・・・・・忙しいから無理。」

このままじゃ埒があかない。あたしは、ここを去ることにした。こ
んな人たちに構っている場合ではない。早く目的地に行かなければ、
と。

「じゃあね。さよなら。」

「ちよ、ちよっと！待ってよ！！！」

でも、これはもはやお約束。やっぱり引き止められてしまった。

「・・・なんですか？あたしは急いでいるんですけど・・・。」

「いいじゃん。ちよっとくらい。」

そういつて三人の中の一人が、あたしの腕を引っ張った。

「はあ、あのさあ……………」

がっ…!!

「ぐはっ!」

……………は?

「っ…!!」

「ううっ!」

……………えっ。な、何?……………そこには、先ほどの3人とは違う男がいた。……………誰。

「……………大丈夫だったか?」

黒い髪に、青色のメッシュ。瞳の色も青……………カラコンか?それにしても、整った顔してんな。

「……………あ、うん。大丈夫。ありがとう。」

……………一応助けられた……………らしいから、お礼は言うべき……………
……………まあ、あんな奴らあたしでも楽勝だったけど。

「…………………………」

え……………。なんで黙ってんの……………。あたしは、何にもおかしいことはないはず。……………こいつ、さっきの男三人組とはまったく違う。こうして目の前にたって向き合ってるだけで、

こいつの持つてる威圧感みたいなものがひしひしと伝わってくる。
早くここから去った方がいい。よな。

「えと……。じ、じゃあ。あたしはこれで。」

「……。お前。何故こんなところにいる？」

「……はい？」

早くこの公園を出ようと思ったら、いきなりそんな事を聞かれた。
……。思わず聞き返してしまったではないか。それにも、相手は律儀に答える。

「……。何故ここにいる？」

「あ、ああ……。ココらへんに会いたい人がいるから……。会いに来たんだ。」

あたしは正直に答えることにした。……嘘をつくのは苦手だ。

「……。そうか……。」

それっきり、この男は黙り込んでしまった。

「……。」「……。」

え……。またすすか？あたし、沈黙って苦手かも……。息苦しい気がしてくるんだけど……。ど、どうしよう……。

「……。ま、まあ、場所は知ってるから。気にしないでよ。」

……。って、こいつが何を気にするんだ！？自分で自分の言ってる事が分からなくなってきた……。

「……………ど」だ。」

「は？」

「場所。」

「えっ？」

「……………送ってやる。」

……………はい？

「い、いや。いいよ。別に。すぐ近くっぽいし。あたし一人で大丈夫だし。」

そのまえに、初対面で送ってやるとかって普通ない……………と、思うし……………。実際今そうなってはいるけれど。

「場所。教える。」

……………言葉が通じねえよこいつ！……………どうしよう。

正直に教えるか？いやいや。でも、この地図簡単に教えていいものなのか？ああ、あたし今人生で一番あわてるか。だって普通こんな展開ないだろうよ……………。そんなあたしに無情にもこの男はさっきの言葉を繰り返す。

「教える。送ってく。」

……………もう決定事項になってる？というか何気に命令口調
なんだけど。

「……ここに行きたいのか？」
「うん。」

あれから何を言ってもこの彼は引いてくれなかったもので、もう正直に教えることにした。そして、あたしは彼に地図を見せたんだけど……。

「……ここに何しにいくんだ？」

「だから会いたい人がいるんだってば。」

「……そうか。」

彼はうぐんと何か悩んでいる様子だ。送ってつてくれるんじゃないかなったの……。

あ、もしかして……。

「場所。分からないならいいよ。あたし一人でもいけるし。」

「いや。場所は知っている……。」

……なんだ。違うのか……。場所が分からなくて案内出来ないんじゃない……と思ったのに。じゃあ、一体何なんだ？

「……まあいい。送ってくぞ。ついて来い。」

「……あ、はあ……。」

その地図の場所に何があるんだ……。？あたし、そこに行っても大丈夫なのかな……。

「……乗れ。」

「……はい……。」

公園を出て、左に曲がったところに一台の車が停まっていた。しかも、ただの車じゃない。……これ、どっからどう見ても高級車だ。も、もしかしてこいつ……お金持ちなのか？ いや……夜月家にも高級車なんて何台もあるから見慣れてはいるんだけど……。まさかこいつまでお金持ちだったとは……。・ココらへんは、お嬢様とかお坊ちゃまとか少ない地域のはずなんだけども……。しかも、運転手さんまでいるよ……。

「どうぞ。遠慮せず乗ってください。」

ニコニコと運転手さんが笑いかけてきてくれている。ちょっと敵ついが、いい人そうだな。

「じゃ、じゃあ。お邪魔しますー……」

中まで広い……。

「……お前、名はなんだ。」

「あ、あたしは美羽。よろしく。」

……夜月って言って、極道だっということがばれたらややこしいから、名字は隠すことにした。

「あなたは？」

「……千歳ちとせ。」

「そう。よろしく、千歳。」

ちなみに、あたしが敬語じゃないのは、おそらくこの千歳とか言う男は、あたしと同じ年ぐらいだろうと思うているからだ。あたしの

勘は、結構当たる方だと自分でも思ってる。・・・まあ、ほとんどのあの最初のアマリの衝撃に、つい敬語を使うのを忘れて・・・今更敬語使うのもなあ・・・って思っただけなだけ。

「・・・会いたい人って誰だ？」

「・・・聖夜って人。」

言っでいいのか迷ったけど、今までの経験から言うとな歳は多分引いてくれないだろう・・・お、なんかこいつとの会話に慣れてきたぞ？

「・・・。。。。。。。」

・・・なんでまた黙るの。駄目なんだって。この沈黙は。やっぱり言わない方がよかつたのかな？

「あの・・・着きましたよ？」

「ああ。・・・降りる。」

「う、うん。」

あれから約10分間。・・・ずっとこの高級車の車内は沈黙を守り続けた。うっ・・・きつかった。なにがってあの重苦しい空気が。あたしはあと1分でも着くのが遅かったら、あの車内で死ねる自信ある。・・・っていうか・・・ここ・・・。

「・・・え？どこ？・・・家は？」

??????

「何突つ立っている。早くしろ。」

「……そういう千歳のバツクに見える工場らしき建物。以外に大きい。……でも、なんで聖夜はこの場所の地図を書いてあたしに渡したんだろう？……謎だ。てつきり、その地図に書かれているのは聖夜の家だとばかり思っていたのに……。とりあえずこの工場の中に入れてみることにした。入って正面にある、少し重たそうな扉を千歳が開けて、その先に見えたのは……。……たくさんの……。……人。しかも、ほとんどの人の頭がカラフルだというおまけつき……。しかし、そんな光景ものともせず、千歳はどんどん先に進んでいくので、あたしは急いで千歳のあとについていった。道行く人たちがそれぞれ千歳に挨拶をしてくる。それにたいして千歳は……。……。」

「……。……あぁ。」

「……。……ずいぶんなご身分みたいです……。……そんなにごいつ偉いのか？いやいや、それより聖夜はどこ……。……？」

「よっ！千歳！！」

「……。……あぁ。」

千歳が階段を上ろうとした時、一人の男の子が千歳に話しかけてきた。あれ？敬語じゃない？さつきまで千歳に挨拶してきた人たちは、皆敬語だったのに……。そんなことを思っていたら、男の子がこっちを向いた。こげ茶色の髪に紫色のメッシュがあつて、瞳も多分カラコンだろうと思われる、紫色の瞳。うっん……。なんていうか、

「……さわやか系？しかもなんか、いかにももてそうな感じの。」

「あれ？千歳が女の子連れてくるなんて珍しいな……っていうか初めてじゃないか！？どうしたんだよ、病気！？」

「……………」

「……………なんだか失礼な人だな。でも、心の底から言っただけで怖いんだけど……………」

「ねえ君、名前は？」

「……………美羽……………です。」

「じゃあ、美羽な！俺は瑛太。よろしくな！！」

「は、はあ……………」

ああ、笑顔が眩しい……………」

「……………入れ。」

「うん……………」

あれからしばらくしてあたしが案内された所は、2階の一番奥の部屋。……………ここに聖夜がいるのかな……………？

「ほら！！」

そういつて瑛太がドアを開けてくれた……………最初に千歳が入っていったけど。気が使えないやつだなあ。千歳の後に、あたしも続く。

「ありがとう、瑛太……………お邪魔します……………」

ちなみに、瑛太はあたしよりも年上らしい……………敬語はい

いって言うてくれたから、タメで話してるけど。そうしてあたしは足を踏み入れた。

・・・・・・・・あれ？

聖夜がいない……。そこにいたのは、2人の男の子だった。……
……なんかここ、男しかいないか？

「ただいまー！！」

部屋に入るなり、瑛太が大きな声でそういった。それに、オレンジの髪の男の子が答えて……。

「お帰りー瑛……太……。え、誰？」

その声に、向こうを向いていたもう一人の金髪のお兄さんも気づいたみたいで……。

「うわっ！可愛いー！！だれが連れて来たの？瑛太か？」

「ちげえーよ。千歳だよ、ち・と・せ！！」

「・・・・・・・・」

「「ええええー！！！！！！」」

「・・・・・・・・」

……さっきといい今といい……なんか、千歳が可哀想になってくるぞ……。そんなに珍しいことなのか？

「とりあえず、みんな改めて自己紹介しようぜ！！」

「……えっ！っていうか……。聖夜は？ここにはいないの？いや、それよりここはどこ？あんた達なんなの……です

か？」

なんであたし流されるがままなんだ……………。

「あれ。千歳言っでなかったのか？」

「……………ああ。」

「あーそうなんだ……………えっと、驚くなよ？」

「う、うん……………。」

なんだ……………？

「簡潔に言っと、俺たちは暴走族で、ここはその溜まり場なんだ。」

……………は？

暴走族って……………あれだよ……………？本当にそんなのあったんだ……………。

会えなくて

「つと、話がそれちゃったな。じゃあ、改めまして、自己紹介するか!」

「あ、うん。そうだね。」

少しの間、あたしは固まっていたけれど、瑛太の声で現実に戻ってこれた。……まあ、よくよく考えてみれば、あたしの家のほうが驚くべきことだしね。極道が存在するんだから、暴走族だって存在する……よね……?」

「んじゃあ、俺からな!俺は、谷城瑛太。18歳で、鬼瀧学園の3年生な!よろしく!」

それに続いて、オレンジ髪の子がしゃべった。

「僕は、宝樹渚だよ!16歳で、同じく鬼瀧学園で1年生ね。よろしくね!」

オレンジの髪に、茶色の男にしては大き目な瞳。瑛太はさわやか系だけど、渚はかわいい系……かな?

「俺の名前は、乱場葉月。17歳で、鬼瀧学園の2年生。趣味は「次、千歳だな!」」

……びっくりした。急に瑛太が大きな声出すもんだから。相変わらずにここにこしたままだけど……。

「………まへちとせ間江千歳。17歳……2年生だ。」
「千歳は俺たちとおなじ高校だからな！じゃ、次美羽の番だな！」

鬼瀧学園か……聞いたことない学校だな、まあ……そこまであ
たし学校について詳しくないから当たり前か。

「あたしは、夜月美羽。城が崎学園の高等部で、2年生。17歳。
皆よろしく。」

うん。これでいいんだよな。………あれ？皆固まってる……
なんで？どっかおかしかったか……？

「じよ、城が崎学園って……あの、お金持ち校の！？」
しばらくして、渚が叫ぶようにそう言った。

「お金持ち校………ああうん、そうだね。」
「すごかったんだね、美羽って……。あそこって、頭いい人しか
入れないって聞いてたけど、本当にそうなの？」

葉月は他より冷静そうだな。

「うん……基本お金持ちなら入れるけど………そうでない人な
ら………そうだね。確かに、頭がいい人じゃなきゃ入れないよ。」

お金持ち様たちは、試験もなしに入れちゃうんだよね。……あた
しは、それがなんとなく嫌だったから、普通の人たちと一緒に試験

受けたけど。そんなことより、気になるのは……。

「皆、なんでそんなに城が崎学園にくわしいの？」

ここからは結構離れてるのにな……。

「そんなの、ほとんどの人が知ってるぜ？有名だからな！」

瑛太も、やっとこつちに戻ってこれたみたい。

「そうなんだ……知らなかった。」

「あははっ！俺たちのほうが知ってるって、なんか変な感じだな！……なあ、城が崎学園ってどんな感じなんだ？やっぱり中もすっごいゴージャスなのか……？」

「んつとね」

それからあたしは、皆に城が崎学園のことについて聞かれるがまま話した。……まあ、たいした話はできなかったんだけど。

「ねえ、ところで聖夜はどうしたの？っていうか、聖夜ってここに来る？」

あたしが城が崎学園のことを話し出して、だいたい15分くらいだった。あやうく、本来の目的を忘れるところだった、危ない……。あたしの質問には、葉月が答えてくれた。

「ああ、聖夜は……もうすぐ来るはずなんだけど……遅いねえ……。……というか美羽は聖夜に会いに来たんだ？」

「うん、そうだよ。そしたら、ここに来る途中で千歳に会って……千歳にここまで連れてきてもらったんだ。ね、千歳。」

「……………ああ……………聖夜は今日は遅くなるというっていた。」

「……………それを早く言ってください、千歳さん……………っというか、いたんだ……………千歳は話に加わってこないからなあ。」

「それって……………どのくらい遅くなるとか分かる？」

「……………7時くらいには来る。」

「そっか……………」

7時、ね……………ヤバイかも。

「あ……………じゃあ、あたし……………また次の機会に来ようかな……………」

「えっ!……………もう帰っちゃうの……………?」

ううっ!

渚……………そんな捨てられた子犬みたいな目であたしを見ないで……………かわいいけど……………。

「まだ4時だろ?もう少しここにいてくれてもいいだろ?」

「そうだよ。せつかく仲良くなれたんだから……………ね?」

……………うわっ!

葉月がそういいながらあたしに抱き着いてきた……………。ちよっ!普通、今日会ったばかりで抱き着いてこないだろ!!

「わ、分かった!!……………もう少しだけなら……………」

あたしが折れると、渚は大げさに喜んだ。

「ほんと！？やったあー！！葉月、ナイス！！・・・だけど・・・」

「??？」

「・・・どうしたんだ？」

「・・・葉月。」

千歳が、葉月を睨んできた。・・・こわっ！！でも、そんな千歳にたいして葉月は笑みを深めた。

「・・・はいはい。わかったよ。」

そういつて葉月は、ゆっくりとあたしを解放してくれた。なんか話の流れがよく見えないけど、とりあえずありがとう、千歳！

~~~~~

そんな時、突然誰かの携帯が鳴った。

「・・・。。。。。。」

そして、無言で千歳がポケットから携帯を取り出した。千歳だったのか。・・・なんか妙にポップな音楽だったんだけど。まあ、それはともかく。メールらしい。・・・聖夜からかな？

「・・・。。。。。。聖夜は今日は来れないらしい。」

やっぱり聖夜からか・・・。



「・・・そつか。じゃあ、また日を改めて来ることにするよ。」  
「・・・送る。」

「いや。いい。・・・悪いし。」

なによりうち、極道だから。

「一人で帰れるか？」

「大丈夫だよ。ありがと、瑛太。」

「でも、ここ柄の悪い奴らばつかだよ？美羽は怖くない？」

「うん、全然。渚だって今まで大丈夫だったんでしょ？」

「いや、それはそうだけど・・・。」

・・・参ったな。本当に大丈夫なんだけど・・・。

「・・・じゃあ、せめて玄関くらいまでは送らせて？」

まあ・・・玄関までならいつか・・・。

「分かった。ありがと、葉月。」

「うん。どういたしまして。」

そういつて葉月はニコリと笑った。・・・皆いい人たちばかりだな。・・・でも困った。なにがって？そりゃあ・・・。

「ねえ、やっぱり家まで・・・。」

「だからいいって。迷惑かけちゃうし。ね？」

「・・・でも、迷惑なんかじゃないし・・・。」

そう言い合うあたしと渚。渚は多分本当にあたしのことを心配してくれているんだと思う。でも、今はその優しさが辛い。だって家が極道だつてことは他人にはばらすなって、拾われた時からさんざん言い聞かされてきたことだし……。この事態をどう切り抜けようか……。話をそらす？……。いや、どうせすぐに元に戻されるに違いない。ちなみに、見送り(?)には全員ついてきた。なぜか。なのに、皆それぞれで話していて、誰一人としてあたしと渚の会話に加わる人はいない。誰か一人くらい渚を止めてくれたっていいのに……。あたしは心の中でそんな愚痴をこぼした……。まあ、誰が悪いわけでもないんだけど……。そして、階段を降りたところで、漸く葉月がこの延々と続く会話に終止符を打とうとしてくれた。

「渚。いい加減諦めなよ。美羽が困ってるだろ。」

瑛太も、それに続いた。

「そうだぜ？本人が大丈夫って言うてんだから、大丈夫だろ。きつと！」

……。瑛太、きつとはいらなから。絶対大丈夫だから。でも、そんな二人の説得の甲斐あつてか、渚は渋々諦めてくれたようだ。渚には悪いけど、二人に感謝だな！！そんなことを思いながら、扉へと進んでいく。その途中下にいた人たちが、道を開けてくれた。それを、当然のように通り過ぎていく千歳・瑛太・渚・葉月……。そして、またふと疑問に思う。なぜ……。なぜこいつらはこんなに偉そうにしているのか。

「ねえ……。なんで、ほかの皆は、千歳たちに敬語なの？」

明らかに千歳たちよりも大人だろうと思われる人が、自然に千歳たちだけに敬語を使っているの、そこから聞いてみた。さすがに、なんでそんなに偉そうなの？って聞くと、嫌な感じに聞こえるだろうし。それには、瑛太が答えてくれた。

「ああ、それなら、俺たちがここの幹部だからだぜ！それで、千歳が副総長な！！」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ええええっ！！！？

まさかの展開・・・？

「お嬢。お帰りつす！！」

「た・・・ただいま。海斗たちはまだ帰ってきてないよね？」

「はい！まだつすよ。・・・どうしたんすか？そんなこそそと・・・」

「なんでもないから。気にしなくていいよ。」

「？」

あたしは、夜月組のあきれるくらいデカイ家が見えてくると、出て行ったとき同様極力人目を避けて、こっそりと入ることにした。海斗やお父さんに見つかる何言われるかわからないしね。でも、問題はこの立派な門を通り過ぎてから。家がデカイのに比例して、人の数も半端ない夜月組。自分の部屋にたどり着くまでに誰かにあつてしまうのは、やはりどこを通っても避けられない。まあ、会ったのが下っ端の人でよかつたけど・・・。

やっぱりこんな心情で人に会うのは吃驚する。

吃驚といえは、皆が幹部・・・しかも、千歳が副総長なことの方が驚いたけど・・・。あれからあたしはまだ渋っていた渚をどうにか説得して、一人で帰ってきた。みんなが幹部だったという事実は無理やり頭の中で納得させた。・・・でも、まさかあの地図に書かれている場所があんなところだとは思わなかったな・・・。楽しかったけど、結局聖夜に会うっていう目的は果たせなかったし・・・。まあ、また会いに行けばいいか・・・。ん？でも・・・そんな気軽

に行つていいところなのか？．．．まあ、いつか。皆悪い奴らじゃなきそうだったし。行つてもそう怒られたししないよね。

．．．そうして無事何事もなく部屋までたどり着いたあたしは、次はいつ行けるだろうかと、次のこつそり抜け出す計画を考えていた。そして、15分後。

いきなりあたしの部屋への入り口から、ものすごい音が響いた。

バンツ！！！！

「！！？．．．か、海斗．．．。」

「美羽！ただいま！！俺がいなくて寂しかったか？」

「いや。別に。」

「そうかー寂しかったか！俺も、美羽がいなくてさみしかったぞ！

！」

「．．．．．．．．．．あ、そう。」

そういうなり、海斗は思いっきりあたしに抱き着いてきた。もつとうにでもしてくれ．．．。

「海斗。離れてほしいんだけど．．．。」

「お？ああ、悪い悪い。」

「？」

今日はやけに素直に離してくれるんだな．．．。そう思つて訝しげに海斗を見ると、海斗は妙に上機嫌そうな顔で言った。

「美羽。今度の日曜日。一緒に遊びに行かないか？」

今度の日曜日か……。うん……。まあ、暇だし。

「いいよ……。暇だし。」

「……。えっ!? 本当か!？」

「うん。」

「……美羽っ!!！」

そして、本日2度目。また抱きしめられた。……。しかもめちゃくちゃ強く。

……。っ!

く、苦し!! 死ぬ……。。

生命の危機を感じて力ある限り、海斗を突き飛ばして少し息を整える。今までもこっぴどい展開はいくらでもあった。本当に海斗には反省してもらいたい。

「と、ところで!!！」

「?どうしたんだ？」

「どこに行くの？」

そっぴどい、海斗はにっこりと笑って……。

「それは内緒だ。」

結局教えてはくれなかった。そっぴどい、こいつはこっぴどい奴だった。

所狭しと並んでいる家やビル。たくさん行き交う人で、その道には音が鳴りやまない。だが、そんな雑音にも負けなくらい大きな声で言い争う2人がいた。

「まったく、なんでお前までついてくるんだよ!?!」

「うるさい!近くで叫ばないでよ!そんなの美羽が心配だからに決まってるでしょ!?!」

「美羽には俺がいるだろ!お前はお呼びじゃねえんだよ!?!」

「あんたがいるから余計に心配なのよ!」

「んだとお!?!」

「なによ!?!」

「.....」

今日は日曜日。日にちが経つのは早いもので、すぐにこの日はやってきた。ちなみに今日は、遊園地に行くらしい。目的地まであと約10分。あたしたちが家を出てから今いるところまで、約30分。海斗と樹は、家を出てからずっとこんな感じだ。なぜ樹がいるのかというと、あたしが携帯で樹に今日遊びに行くことを伝えたから。そしたら、なぜか樹までついてきたのだ。あたしは別に全然かまわないし、むしろ樹がいてくれたら楽しいと思う。ただ、この2人がそろると、こちら側としては迷惑極まりない・・・というか、疲れるといっつか・・・。なので2人には悪いが、極力2人の後ろで他人のふりをして、関わらないようにしていた。まったく、この2人もこんなに顔を合わせるたびに喧嘩してよく飽きないよなあ・・・。いつそ感心するよ・・・。

あたしは2人にばれないように、今日何度目かもわからなくなったため息を吐いた。

「すごい……」

「だろ！？俺、一度ここにきてみたいと思ってたんだよなあ。」

「私はもう来たことあるけどね。」

「え！？そうなんだ。」

「うん。お父さんの仕事のついでだけ。」

そんなことを喋りながら、あたしたち3人はこの広大な遊園地の中へと足を踏み入れていく。

遊園地の真ん中には大きな観覧車。その周辺には絶叫系の乗り物がたくさん。そして、そこかしこにあるホラーハウスやカラクリ屋敷つばいのや食べ物屋などなど。

実は、遊園地自体片手で数えるほどしか来たことがないけど、こんなに大きな遊園地は初めて見た。思わず、感嘆の息が出てしまうほど立派なところだった。周りは、休日なこともあって人で溢れかえっている。

「よしっ！じゃあまず、あれから乗りに行くか！！美羽、行くぞ。」

「うん。樹もっ。」

海斗は、はぐれるといけないからとあたしに手を差し出してきた。あたしも、それには素直に従い樹にも手を差し出した。海斗が顔をしかめたのは見ないふりで。そしてあたしたちは、とりあえず片っ端から乗ることにした。絶叫系のを何回か乗って、少し休憩。そして次は、屋内のアトラクションを楽しんでから1時くらいに昼食をとり、また乗り物へ。さすがに疲れてきたので、あたしたちは近くの休憩場で休むことにした。



「美羽。大丈夫？」

「う、うん。」

「俺、なんか飲み物買ってくるな。」

「うん。ありがと。」

・・・あたしたちっていうか、主にあたしが疲れたんだけど。そんな時ふと見た視線の先に、忘れられない後姿があった。  
あ・・・あれて・・・。

「!!!!」

「!?!?・・・み、美羽!?!?どうしたの!?!?」

「ごめん樹。ちよつと待ってて。」

「ええ!?!?!?ちよ、美羽!?!?」

あたしは勢いよく立ち上がり。頭で考えるよりもはやく、駆け出していた。あ、あれって・・・もしかして・・・?い、いや。でも・・・人違いかも・・・遠かったし・・・でも・・・!ああ、くそっ!!この人込みでは、どんなに思いっきり走りたくても、人の波に吞まれてそれが叶わなかった。  
そうしている間にも、だんだんとあの後姿はこの人だけに紛れて見えなくなっていくてしまう。

「・・・っ!?!?!?す、すみません!?!?」

途中で、何度か人にぶつかりながらも、どんどん進んでいく・・・が、駄目だった。あたしは、いったん諦めてとりあえずこの人ごみの中を抜けることにした。

「はあ・・・。」

なんともいえない絶望感に、あたしはため息を吐くことしかできなかった。そうこうしているうちに、2人の見知らぬ男が近寄ってきた。．．．いかにもチャラそうな。

「ね、君一人？なら、俺たちと遊ばない？」

はあ、またこの展開か．．．。

「いえ、ごめんなさい。友達ときてるので。」

「そつか．．．はぐれちゃったの？一緒に探そうか？」

「いえ。大丈夫です。邪魔してごめんなさい。それでは。」

邪魔はしてないけどね。あたしはニコリと笑顔を作った。．．．だめだ顔疲れてきた。だいたい今は笑顔になれる気分じゃないしさ。そしてあたしはなるべく自然にこの場を離れ．．．られなかった。うん、大丈夫。想定済み。

「．．．つ。ちょ、ちょっと待つて！一人じゃ危ないからさ。ね？」

いやいやいや。ここにいる方が危ないって。何？「ね？」って？何がね？なのさ。意味わかんねえ。っていうかあんた達そんなに慌てて．．．本当はこういうの慣れてないのか？

そんな時、ふとどこからか視線を感じた。いや、視線はもうずっとこの状況のせいで受けてるんだけど、そんな優しいものじゃなくて．．．悪意の籠められた視線。あたしはこの2人の男に対応しながら、こっさりその視線の場所を探っていた．．．そんな時だった。

「ごめん。待たせた？」

「「「え？」」」

いきなり聞こえた声に、そちらを振り返ってみると……そこにはあたしがさつきまで探していた姿……聖夜がいた……。というか、ハモってしまったではないか。この男2人組に……。って、え？あれ……。いない。

「もう2人とどこかに行っちゃったよ」

ええ！？早！！逃げ足だけは早いとはまさにこのことか？……。ま、そんなことはどうでもいいか……。

「ありがと、助かった。……でも、どうしてこんなところに……？」

「ああ……偶然だよ。でも良かった、間に合って。たまたま通りかかった人たちの話聞いちゃって……。『長い黒髪の、とてもきれいな子がナンパされてる』って言ってたから、気になって来てみたんだ。もしかしたらって。」

「そうなんだ……。」

そんな偶然もあるんだなあ……。とりあえず聖夜に会えたんだから、あの2人には感謝すべきかな？

「ところで、美羽は1人で来たの？」

「……………あ。」

そ、そうだ！！忘れてた！！

「ううん。海斗と樹と3人で。あ、樹っていうのは、あたしの親友

のこと。」

「そっか。戻らなくて大丈夫なの？」

「・・・わかんない。」

「じゃあ、一緒に戻ろうか。どこにいるか分かる？」

「えっと確か・・・休憩所。観覧者の近くのところ。」

「ああ。分かった。はい、はぐれるといけないから。」

「えっ、う、うん。」

そうしてあたしたちは、海斗たちの多分待つてくれているだろと思われる休憩所へと向かっていった・・・はぐれないよう手もつないで・・・な、なんか恋人みたい・・・。一度そう思うと途端に恥ずかしくなってきた、顔をあげられなかった。ああ、でもよかった・・・あたしだけだと絶対に迷子になってたような気がする・・・。ここから休憩所までは結構な距離がある。・・・ってことは、あたしも結構な距離を走ってたんだなあ。自分でも吃驚。その道中あたしは、ずっと聞きたかったことを聖夜に聞いてみることにした。

「そういえば、聖夜も・・・その・・・ば、暴走族・・・なの？」

「そっだよ。・・・怖い？」

「ううん。怖いなんて絶対に思わないよ。・・・それに、あたしの家・・・あれだし」

それに、いい人たちばかりだったからね。

「そっか・・・千歳たちにはもう会ったんだよね？」

「うん。・・・幹部だったことには驚いたけど・・・もしかして、

聖夜も幹部なの？」

勝手にあんな場所教えられるくらいだから・・・。

「うーん……幹部っていうより、総長……かな。」

「へー……で、え？……そ、総長……？」

「そ。あの暴走族、神龍っていうんだけど、その所謂一番偉い人分かる？」

「う、うん……なんとなく。でも……。」

……でも、聖夜が総長……な、なんか、結びつかないな……。

「……美羽。ちよつとあっちに行こうか。」

「え？……ええ！？ちよ、聖夜！？」

そうしてあたしたちが向かった……というか、あたしが聖夜に引っ張ってこられたのは、さっきの人込みとは打って変わって……人っ子一人いない、とても、とても静かなお店の裏側。その壁に、聖夜はあたしを優しく押し付け……。

……美羽……お、押し付けた……？

「……え、せつ……聖夜……!？」

え……なんで？なんでこんなことになってるわけ!？あたしに寄り掛かるようにして、聖夜がこちらに少しだけ体重を預けてきた。

「……つ……せ、聖夜？」

「しつ……ちよつと黙ってて。」

聖夜は静かにそういって、あたりを注意深く見渡している。

……!!

・・・まただ・・・。また・・・さつき感じたのと同じ悪意の籠められた視線があたしを貫く。場所は・・・あっ！・・・あそこだ。聖夜もこの視線に気づいてたんだよな・・・。

「聖夜・・・あの木と建物の裏側・・・5人くらいだと思う・・・。」

あたしがそういうと、聖夜は少し驚いたみたいに目を見開いた。あたしは昔から、人の気配とかを読むのは得意だった。・・・まあ、昔からって言っても、海斗たちの家族になってからだけど・・・。そんなことを思っているうちに、さっきの視線の主の男たちが、あたしたちの前に姿を現した。

「・・・お前、その女・・・夜月の娘だな？」

・・・  
はあ・・・メンドイ。

実際こういう場面はもう何度も経験済みなので、それほど驚かない。多分、夜月組の誰かに恨みを持つてる人たちだろう。・・・それとも、あたし自身か・・・。どっちにしろ、聖夜を巻き込んでしまうのはいただけない。

「聖夜。・・・下がってて・・・。」

・・・すぐに終わらせてやる・・・。そうしてあたしが一歩踏み出そうとすると、なぜか聖夜に阻まれた。

「・・・っ！？聖夜!？」

「美羽はそこで大人しくしてて。」

「でもっ！」

「いいから。」

・・・・・・・・・・・・・・・・っ！

聖夜の瞳がまっすぐにあたしを見る。・・・その中に含まれる威圧感に、あたしは逆らえなかった。それから聖夜は男達へと視線を戻した。それと同時に、今までのなんだったのかというほど聖夜を取り巻く雰囲気が変わる。・・・思わず立ち竦んでしまうほどの雰囲気。それだけで、聖夜の強さが見て取れた。男共がそろいもそろって息をのむ音が聞こえた。

・・・・・・・・大丈夫だ。聖夜は負けない・・・。

それはもはや確信だった。絶えることなく与えられる安心感が、さつきまでの不安を取り除いてゆく。そして沈黙を守り続けていたその場は、一筋の風が吹くと同時に一気に騒がしくなった。

## そして結果的には

．．．．．強い。一人ひとり、最小限の動きと力で確実に倒していく聖夜。体格も数も明らかに相手の男たちのほうが有利なのに、聖夜が負けるなんて選択肢すら浮かんでこないほど。そして、小さな乱戦はものの5分もかからずに終わった。

「聖夜っ。．．．怪我はない？」

「うん。大丈夫だよ。」

「そう．．．ごめん、巻き込んだじゃって。聖夜は何も関係内のに。」  
「いって、気にしないで。．．それに、これは俺の意思で動いただけだから。」

「．．．．．ありがとう。」

そう言った後、あたしは倒れている男たちのおそらくリーダーだろうと思われる男のところへと足を運んだ。

「．．．．．何が目的？」

「．．．．．っう。誰が．．．言うかよ．．．！」

「．．．個人的な恨みとかじゃ．．．なさそうだな。．．．組織みか．．．。」

そういった瞬間、男が息をのむ様子が窺えた。どうやら、その線で間違いないらしい。

「．．．．．どこの組の奴？」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それきり男は黙ってしまった。まあそれをいつちゃあ、今度は仲間に何されるかわかんないかもしれねえな……。……。お父さんたちに伝えた方がいいか……。

「もうあたしたちの前にその面出すなよ。」

こんなところでいつまでもこんなことやってても何にもならない。あたしと聖夜は、男たちをそのままにその場を後にした。

「!?!?・・・・・・・・美羽!?!?!」

数分して、漸く海斗たちと合流できた。どうやら、樹と海斗はずっと待っていてくれたらしい。……。というか、迷子センターに海斗が行こうとするのを、樹が止めてくれていたらしい。微妙に樹の息が上がっている。聖夜を追いかけたのは後悔してはいないが、少しだけ反省した。

「ごめん。遅くなって。」

「ほんと。どこに行ってたの……。あなたは?」

やっと2人とも聖夜に気づいたらしい。そっか……。海斗はこの前会ったけど、樹は聖夜の顔とか知らないんだ。

「和泉聖夜です。美羽の・・・友達。」

『友達』というまでに少しだけ間があった聖夜。そうだよな・・・まだ数えるくらいしかあったことないし・・・そう考えると、あたしと聖夜って微妙な関係なんだな・・・。そして、少しだけ目を見開いてあたしと聖夜を交互に見る樹。・・・そういえば樹には前に聖夜の話したことあったんだっけ・・・。

「なんだ友達か・・・つまんないの。」

・・・樹・・・。なんか明らかに落胆した目であたしを見ないで。

「てめえ・・・美羽に何かしたんじゃないだろうな・・・。」

そんなことを言いながら聖夜を威嚇する海斗。

・・・海斗・・・。そんなこと言ったら聖夜に失礼だろ。

「何もしてないし、現在進行形で美羽に抱き着いてる君に言われたくないよ。」

そう海斗に言い返す聖夜。

・・・聖夜・・・。き、聞かなかったことにしよう。いちいち反応してたらきりがない。

周りがあたしたちを見ていろいろな反応をしている。目立ってんだろうな、あたしたち。まあ、人があんまないところだよかつたよ。そしてあたしたちは、ただ一人反対する海斗を押し切ってっ聖夜も一緒に、帰りまで遊ぶことにした。

そして……。

現在、午後6時。観覧者にて。

その観覧者の中には、何故かあたしと聖夜の二人しかいなかった。

「美羽、大丈夫？……つて、あれだけ遊べば疲れるのも当然か。」

「う、うん……。今日はありがとう。あと本当にごめん、巻き込みじゃって……。」

「まだ気にしてたんだ？……あの事なら、俺も美羽も何ともなかったんだし、本当に俺のことは気にしないで。」

「……うん、ありがとう……。」

ちなみに、海斗と樹は外で待機中である。今も観覧者の窓から見下ろせば……。口喧嘩をしている。つくづく元気な二人だと思ふ。できればあたしもあそこに戻りたい……。まだ乗ったばかりだけ。

「……え？なんでかって？」

「……そりゃあ……。」

「……。」

「……あたしは、こういう沈黙する場面が苦手だからだよ。や

べーよ、もうどうしたらいいんだ。シーンとしすぎてて物音ひとつ立てれねえーじゃねえか。やばいやばいやばい……。心が折れそうだ。精神が崩壊しそうだ。観覧者って、外の景色眺めて心身ともに休めるところじゃなかったか？もう、なんていうんだろ……。冷や汗（？）がたらたらだよ。ここの遊園地にはいるいるな乗り物があるけど、そうやらこの観覧者がメインの乗り物らしくて、その。かなり、かなーりデカい。イコール乗っていられる時間も増えるわけで。。。。。

駄目だ。無心になろう。こんな沈黙が後何分も続くと思うだけで。。。。じ、地獄だ。

くすつ。。。。。。。

そんなことを思っていると、いきなり破られた沈黙。そして、誰かの笑い声。この中には今、あたしと聖夜しかないわけだから。。。。あたしは、ちらつと聖夜を見てみた。そこには、何故か笑いを必死にこらえている聖夜の姿が。。。。。

「。。。。せ、聖夜。。。。？」

「あははっ。。。。はあっ。。。。ごごめっ。。。。あまりにも面白かったから、つい。。。。。」

「？」

な、何が。。。。？

「美羽、内心すっごい慌ててたよね。。。。？それが顔に出てて。。。。。。可愛かったよ。」

「……………っ……………」  
「顔真っ赤。……………本当に可愛いな……………」

その言葉で、さらに顔に熱が集まっていくのが自分でもわかって、顔を上げていられなくなった。つていうか聖夜なんか……………口説きなれてる？その直後、いきなり揺れた観覧者の箱の中。少し吃驚して、つい顔をあげてしまった。そしてすぐ目の前に見えたものは、整った聖夜のきれいな顔、ところどころはねているけど艶のある銀色に輝く髪、ニコリと細められた青い瞳。あたしは再び慌てて顔を俯かせようとした。

……………が、

寸前で聖夜に顎を捕まえられて、強制的に元の位置に戻されてしまった。ちょうどそのとき、あたしたちが乗っている観覧者は半分を過ぎた。

「せ、せせ聖夜……………!!」

「……………なに？」

「はは離してっ。」

「駄目。」

「……………っ!聖……………」

「もう黙ってて。」

そういうと、聖夜はさらにあたしとの距離を詰めてきた。……………やっぱり聖夜って不思議だ……………。行動が読めない……………。そして聖夜はあたしの首筋に顔を埋めてきた。

「……………美羽。」

「……………なっ、なに……………？」

突然低い艶のある声で名前を呼ばれる。聖夜の息が首筋にかかって少しくすぐつたい。

「美羽は俺のこと……好き？」

「……え……うん……」

いきなりの質問にちよつと戸惑ったけど、そんな質問ならあたしの答えは決まってる。嫌いなわけがない。……その『好き』が like の方なのか love の方なのか、何を表すのかはわからないけど……。

「……好きだよ、聖夜。」

これが、あたしの気持ち。きつと、会ったその日から好きになってた……。最初はただ純粹に会いたいって思ってたんだけどたのに。いつしかそれは自分でもわかってしまうくらいの恋心になつていつて。改めて今日、聖夜が好きなんだって実感した。

「……俺も、美羽が好き。」

その言葉を聞いた瞬間、涙が溢れそうになつて必死で堪えた。笑いたいのにな泣きたくなるような……。今はただこの想いを大切にしていきたいと思う。

「……ねえ美羽。」

「ん？」

「キスしていい？」

「うん……え。は？」

……な、何この急展開。なんか勢いでうんって返事しちゃったけど……いや、あたしは別に構わないんだけど……。やっぱりちょっと恥ずかしいかも……。

「……………っ！」

「……………美羽？」

ぎゃー！やめろ、そんな声であたしを呼ばないで！！聖夜が顔を覗き込んできたけど、あたしは思いつきり目が泳いでいる。ヤバイ、まともに目が合わせられない……。なんかもうこんな自分が嫌で泣き出しそうになってくる。そんなことを思っていると、突然聖夜に顔を両手で包まれて上を向かされた。

「……………！！……………んっ……………」

え……………これ……………き、キスされてる……………？

「……………っ！せ、聖夜……………!？」

「うんって言ったのは美羽のほうだよ？……………それに、もう抑えられそうになかったから。」

そしてなんやかんやで恋人になったあたしたちでした。

## 宝樹兄妹

ごめんね・・・。

『どうしてそんな顔するの？』

もう・・・辛い思いなんかさせないから。

『ねえ・・・笑って？』

うん、笑うよ・・・だから心配しないで・・・。

これからも、ずっと・・・ずっと・・・。。。

守るから



遊園地から帰った次の日。今日からまた学校だというのに、あたしの精神は疲れ切っていた。

「はぁ・・・疲れたあゝ・・・。」

「美羽？どうしたんだ？」

「・・・別に。」

独り言を呟いただけなのに、何故か、いつの間にか隣にいた海斗。はつきり言う。疲れたのは海斗のせいだ。

あの後・・・あたしと聖夜がああの観覧車、最初は四人で乗るつもりだったんだけど、なんかあたしたちいつの間にかいろいろ買っちゃって・・・荷物番が必要になって、その荷物番はじゃんけんの結果樹に決まったんだけど・・・。やっぱりあたし的には樹だけっていうのは心配で・・・いや、だってね？前に樹と買い物に行ったとき、あたしちよつと買いたいのがあつて『ここで待ってて』って買って買って戻って来てみたら・・・樹いなくなつてたんだぞ！？しかもその理由が・・・暇だったから、と来た。これは心配するだろ！ナンパもされてたみたいだったし・・・。。

まあ、そんなこんなで、樹はすつごい不満そうな顔してたけど、さすがに女の子一人残すのは心許ないってことで・・・何故か海斗と聖夜だけがじゃんけんして・・・ま、聖夜が勝つたってことだな。

因みに、海斗と聖夜の二人でじゃんけんしたのは、『男二人で観覧者なんかに乗りたいくない』・・・だからだそうだ。

あゝ話が長くなっちゃったな・・・えゝと、それで海斗が駆け寄っ

てきたところまではまあ想定内だったんだけど……。

聖夜が……………ね……………。

『あ、俺たち今日から恋人になったから』

そういうと、聖夜はあたしを抱き寄せた。恥ずかしいやらちょっと嬉しいやらで、恐らくあたしの顔は真っ赤になっていただろう。

『ちよ、聖夜!?!』

『……………はああああ!!?!』

……すごいね海斗と樹の叫び声(?)で、周りの人たちがこちらを注目した。

は……………恥ずいっ!!

そんな周りの視線すらも気にならないのか、二人はあたしに詰め寄ってきた。

『ちよ、美羽!……………本当なの?』

『違うよな!?!』

『え……………い、いやあ……………その……………』

『本当だよ?』

『お前に聞いてねえ(ないわ)よ!!!!』

……………おお……………ハモった。そりゃあもう見事に。というか

樹はどちらかという応援してくれていたんじゃないのかな。まあそれは置いて。そのあと、聖夜と別れた後もずっと質問攻めにされたってわけ。

………本当に。

………疲れた………。

そんな気持ちのまま、あたしは学校へと向かっていった。学校でも、いろいろと気が抜けないんだよな……家のこととかの話題は極力避けなきゃいけないし……。あ、今日は部活だから帰り遅くなるな……。ただでさえ疲れてるっていうのに……。

因みにあたしは、部活をいくつか兼部している。今日は……陸上。海斗は今日は顧問の先生が出張かなんかで無くなったらしい。樹は部活やってないしな。今日は一人で帰宅か……まあ、その方が自分のペースで歩けるからいいけど。

校門に入って廊下を歩いていると、皆挨拶してきてくれる。こういうところも、この学校のいいところなんだよな……なんかこう……全体の雰囲気を感じる感じ？お金持ちとかそうじゃないとか関係なく仲が良くて……微笑ましい限りで。そんなことを考えながら、朝のHLが終わりいくつかの授業を終えていく。

……そして、部活の時間になった。

「美羽さんっ！！頑張ってー！ー！！！」  
「夜月ー！あともう少しだぞー！！」

そんないろんな部活見学者等々の声援ももらいながら、走っていく。今日は、校内をぐるっと二週して終わり。・・・簡単言ってるけど、これが結構きついんだよな。・・・この学校、一応金持ちが来る高校なだけあって無駄に面積が広いから。しかも二週って・・・。そんな愚痴を心の中でこぼしながら、あたしは二週目に入って行った。そして、ちょうど校舎付近を走っていたころ。

「先輩っ！危ないっ！！」

「・・・っ！！」

「キヤアアアッ！！！！！」

頭上から植木鉢が落ちてきて、そこであたしの意識は途絶えた。

「では、お大事に。」  
「ありがとうございます。」

ここは病院。その後、上から落ちてきた植木鉢を避け切れなくて左腕にけがをしたけど、幸いあの植木鉢が頭に直撃することはなかった。保健室で診てもらって手当はしたけど、一応骨折とかしていないか診てもらった方がいいということ、至急先生の車でこの病院へと送ってもらった。因みに植木鉢は、教室で走り回っていた時に

その一人が植木鉢にぶつかって、誤って落としてしまったんだそうだ。後でものすごい勢いで謝られたけど、まあ過ぎてしまったものはどうしようもないし、別に怪我也大したものではなかったのだから気をつけてくださいね程度で済ませた。

・・・まあ、出血は酷かったから焦ったのかもしれないけど。

もう診察が終わったので、これから帰るところだ。先生には仕事もあるし、帰ってもらうことにした。・・・あのまま送ってくなんて言われたら逆に困るしな・・・。海斗には、携帯で遅くなるとだけ伝えておいた。怪我したなんて言ったら速攻でここに来て騒ぎ出さだろうし・・・それだけは避けたい。

そんなことを思いながら、病院の出口へと向かっていく。

・・・この病院も結構デカいんだよな・・・。建物は見上げると首が痛くなるくらい大きいし。建物の外には緑が程よくあって・・・本当に清潔な感じ。

「・・・ついや！・・・っ」

そんな時、どこからかかすかに女の子の声が聞こえてきた。あたしは聞き間違いかと耳を澄ましてみる。

・・・。。。

なんだ・・・やっぱり聞き間違いか？幻聴でも聞こえたのかな・・・ここ最近でものすごい疲れたし・・・。そうしてあたしは足を踏み出そうとした。

・・・が、それは直後に聞こえた例の声がかきつけで止ま

ることになった。

「やめっ！……っやめてください……っ！！」

「騒ぐなっつってんだろ！！おいっ、口塞げ！！」

「~~~~っ！！」

建物の陰からだ……。女の子と、男が二人くらい……。ま、なににせよこんな場面見ちゃったら助けないわけにはいかないよな。

「早くどっちか選べよ。金全部出すか俺らに……。」

「何してんの。」

「だからっ！……は……な、なんだお前！！」

「俺らは今取り込み中だから、あっちに行ってるよ！！」

あたしがいきなり話に割って入ってたから、男二人と女の子は驚いたみたい。

「情けないとか思わないの？……男二人で寄ってたかって女の子苛めちゃってさ。」

そっいつてちらっとな女の子のほうに視線を向ける。

……あれ……なんかどっかで見たことある顔だな……？

そう思い必死に記憶を巡らせていたら、それは直後に聞こえた怒声で遮られた。

「んだとっ！！」

「お前には関係ねえだろ!!」

そういうと同時に男二人は一斉にあたしに殴りかかってきた。そして、女の子を捕えていた手が外された。チャンスと思い、あたしは攻撃を軽くかわしながら女の子に向かって声を飛ばす。

「早く逃げて!!」

そういうと、女の子はハツとしたように立ち上がって、どこかへと走って行った。さて、人呼ばれたら面倒だし……さっさと片付けるか。

「てめえっ……。」

あたしが女の子を逃がしたことにより、男二人はさっきよりも思いつきり殴りかかってきた。まあ、その程度簡単に避けられるけど。

「ところで、なんであんなことしてたわけ？」

「はぁ!!? お前には関係ねえだろ!!」

「……ま、どうでもいいけど。どうせくだらない理由だらうし、っ。」

こいつらには何を言っても無駄だと確信したので、気絶しない程度に殴って帰らすことにした。

「……っな!？」

「ぐあっ!?!」

……弱い。口ほどにもないな。

「……………まだやる?」

「……………ッ」

「てめえっ……………っお、覚えてるよっ!!」

そういつて男二人はよろよろと去って行った。とうか覚えてるよなんて言う人はさすがにいないだろうとか思ってたのに……………いたよ。

そしてすぐ、さっきの女の子が現れた。

「……………!!お、お姉ちゃん!!」

「どうしたの?」

心配してまた来てくれたのかな……………?よく見てみると、とてもかわい子だった。色素の薄い茶色の髪に、茶色の大きな瞳。中学生くらいだと思う。

……………にしてもやっぱりどこかで見たことあるような顔つきだな……………。

「……………?お姉ちゃん、さっきの人たちは……………?」

「ん?ああ……………もうここにはいないから。大丈夫だよ……………怪我とかない?」

「あ、はい……………あの!さっきはありがとうございました!!」

そういつて、ガバッと効果音が付きそうなくらいの勢いで頭を下げられた。

「お礼に何か……………」

「風波!!!大丈夫……………つて、え!?美羽!?!」

え……………な、なんで渚……………!?!?



つて………あ………。

その時あたしは、この女の子は渚に似ていたんだとふと思った。

「美羽っ！本当にありがとう!!」

「い、いや……ほんといいから、お礼なんて……。」

あたしは今、渚の家にいる。家の中は、とっても明るくて生活感があつて……あの家に慣れてしまったあたしとしては、なんか新鮮な感じがする。なんでいるのかというと、あの後この宝樹兄妹に半強制的に連れてこられたからだ。因みにあの渚の妹の名前は、ななみ 凧波ちゃんと言つらしい。

「なぎ兄ちゃん！お菓子持ってきたよ!!」

「あ、ありがとう凧波!!」

……それにしても仲のいい兄弟だな………なんか微笑ましい。自然と他人の気持ちも和やかにさせる……二人揃うとさらにはわわ〜んとした空気が流れているような気がする。

「みつおねえちゃん!!どうぞっ!!」

「あ、ありがとう……。」

まあ、癒されはするんだけど……このテンションにはついていけ

ない……。

「美羽……本当に何もされてないの？」

「うん。」

「ごめんねみう姉ちゃん……私のせいで……。」

「き、気にしないで！勝手にあたしが首突っ込んだんだし、風波ちゃんに何もなくてよかったよ！！……それより、どうしてあんなことに……？」

「あ、うん……あれは私が走ってたらぶつかっちゃって……。」

「……それだけで？」

「うん……。」

そんなことであんな……本当にくだらない。もっと大人になれないのかよ……ま、とにかく何事もなくてよかったか。

「ところで、美羽はなんであんなところに居たの？」

「ああ……ちよつと部活中に腕怪我しちゃって、これ。」

そういつて、左腕の包帯を巻いてある所を持ち上げる。因みに、あいつら男二人組は足と右腕を使って倒したんだ。

「そうだったんだ……それでその怪我……。大丈夫なの？痛くない？」

「うん。そんな見た目程たいした怪我じゃないから。」

「そっか、よかったあ……。でも、どうしてそんな怪我しちゃったの？」

う……なんかさつきから質問攻めにされている気がするの。あたしの気のせいかな？

「えっと、校舎の近くを走ってた時に上から植木鉢が落ちてきて・  
・あたしが避け切れなかったから・・・。」

「えええ！？だ、大丈夫だったの？そんな・・・。」

「だから大丈夫だって。骨折だつてしてないし、ほら。」

「・・・落とした奴らは見つかったの？」

あれ・・・なんか声のトーンが下がったような・・・下がらなかつたような・・・。渚俯いてるから顔がよく見えないからわかんねえな・・・。

「うん。向こうから誤つて来てくれた。不注意だつてさ。」

「・・・それで、美羽はあっさり許したの？」

「まあ・・・過ぎちゃったことはもう何言つたつてしょうがないし・・・。」

そうあたしが言うと、渚はやっと顔をあげてくれた。

「そっか・・・美羽は優しいんだね・・・僕、美羽のそういうところ好きだよ！！」

慈しむような笑みから、満面の渚らしい笑みへと変わっていった渚の表情。不覚にも少しだけドキツとしてしまった。

「あ・・・ありがとう。」

「あれ？美羽つたら照れてる？可愛いい〜！！」

「照れてないってば！」

お願いだからもう勘弁してください。そういうの苦手なんですつてあたしは・・・。そしてあたしと渚は、途中から凧波ちゃんも会話に加わつて3人で他愛も無い話をした。なんで渚たちがあんな病院

にいたのかは気になったけど、渚はあんま聞いてほしくなさそうだったので、聞くのは断念した。  
そして、そろそろ帰ろうというとき。

前にもあったような光景が今度は違う場所で繰り広げられていた。

「今度こそは、家まで送らせてもらおうからねっ！」  
「だ……だからいって、そういうのは。」

……まあ、ある程度予想はできていたことなんだけど……。

「よくないよっ！ 風波を助けてくれたお礼も兼ねてさっ！ ね？」

いやいやいや！ だからそんな目で見つめられても駄目なものは駄目だから。あたしはその手にはもう引つかからないから。ど……どうしよう……これもある程度は予想できていたんだけど、一向に渚が引いてくれる気配がない。

……終いには……。

「なぎ兄ちゃん！ 私も送っていきたい！ みう姉ちゃん、いこっ？」  
「い、いや……そこまでしてもらおうわけには……。」  
「何言ってるの美羽！ 僕たちが送っていきたいんだから、お願い！  
！送らせて……！」

ひいひい！！

い、威力が二倍になった……。よし、ここは少しだけ、少しだけ食い下がるう。

ただし……。

「じゃあ、途中まで・・・いい？」

これ以上は絶対に食い下がらないぞ！

・・・そして、空が赤く染まり始めてきた頃。あたしはやっとどうにか二人を説得して、途中までということになった。  
・・・だが、例のやり取りはぎりぎりまで続く・・・。

「美羽・・・本当にここまで大丈夫なの？」

「うん。もうすぐ近くだから。」

ごめんなさい。嘘です。ここから歩いてても、玄関には何十分とかがかります。・・・いや？家自体はもう見えてるんだけどね？何せうちは縦に大きいんじゃないかと横に大きいからさ、面積無駄に使ってるしな・・・家は見えても、そこからがまた大変なんだよな・・・。

「ならどうせだから最後まで送らせてよ。」

「い、いや・・・それは悪いし、渚たちも早く帰らないと親の人が心配するよ？」

さつき渚の家に行った時に見た、穏やかでおっとりとしていて・・・とにかく優しいそうなお母さんだった。そんな人に迷惑をかけたくない。それにまた凧波ちゃんかどっかの誰かに絡まれないとも限らないし・・・可愛いからな凧波ちゃんは・・・渚もだけど。

ふと、渚のお父さんってどんな人なんだろうって思う。そして一番思い描く渚のお父さん像・・・優しいようで、どっちかというところ可愛い系で・・・渚や凧波ちゃんともよく遊んでそうなイメージ。自然とそんな人が頭に浮かんできた。

「…………美羽ってさ、なんか妙に自分の家の場所とか隠してるよね…………。」

「う…………、「ごめん…………隠してるとかじゃないんだけど…………。」

渚って意外と勘がいいんだよな…………。さすがに、そこを突かれると痛い。でも、そんなあたしに救世主は現れた。

「なぎ兄ちゃん！みう姉ちゃんが困ってるでしょ！？早く行こつ、ね？」

「…………うん。そうだね。じゃあね、美羽！今日はいろいろとごめん。あと…………ありがとう！！」

「みう姉ちゃん！！またねっ！！」

「あ、うん。二人ともバイバイ。」

そうして、二人は来た道に戻って行った。とりあえず……………  
ありがとう、凧波ちゃん！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4030y/>

---

極道と暴走族

2011年11月22日02時58分発行